

最近の欧米におけるUSPD研究の紹介とUSPD研究の問題点: Hartfrid Krause "USPD"(1) [資料]

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山辺, 知紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17737

【資料】

最近の欧米における USPD 研究の紹介と USPD 研究の問題点*

— Hartfrid Krause “USPD” (1) —

山 辺 知 紀

前 書 き

以下で私が訳出し紹介しようとするのは、Hartfrid Krause ; USPD—Zur Geschichte der Unabhängigen Sozialdemokratischen Partei Deutschlands—(Frankfurt am Main-Köln, 1975) の「序論」(SS. 5-39) の部分のみである。この部分は、400ページに及ぶこの本(本文 278ページ、付録 119ページ)のほんのわずかの部分にすぎないが、そこには、最近の欧米における USPD 研究の紹介がなされており、また USPD の問題点に対する著者なりの指摘もあり、これから USPD について学ぼうとするものにとって、効果的な導入部としての意味をもっているといえる。

周知のごとく、USPD は1917年4月に主として SPD の戦争政策に反対してゴータで創立されたが、にもかかわらず、そのわずか3年半程後の1920年10月、ハレでの分裂大会を経験し、当時の党员80万のうち活動的な左派部分30万を共産党へと吸いとられてしまった。そしてその後は当時の政治過程の中でこれという活動もせぬまま、1922年9月、再度 SPD と合同し、最早独自の党としての歴史的・政治的存在を失なっていた。しかしこの党は、カウツキーやヒルファーディング等いわゆるマルクス主義中央派(以下の紹介では、中間派と訳出してある)の理論家をその中心にもち、分裂直前の1920年6月の第一回国会議員選挙では、490万の票を獲得し SPD の560万票に迫る程の勢力をもつ党でもあった。更にまたスバルタクス・ブントとともに11月革命の推進力であった革命的オプロイテは、やはり USPD に属する部分であったし、あのミュンヘン

* この見出しは訳者が挿入したものである。

での革命権力を掌握したクルト・アイスナーも USPD の黨員だった。そしてまたローザ・ルクセンブルクやカール・リープクネヒトの命を奪った1919年の1月闘争後の革命状況の中では、指導部を失なって混迷していた KPD (S) に代って、いわゆる政党レベルではドイツ革命の牽引力としての役割を果たすべきだったのもやはり同じく USPD であったかも知れない。にもかかわらず、第三インター（コミンテルン）創立（1919年3月）後の革命運動の新しい状況の中で、USPD は次第にそこへの現実性を失ない消滅していった。

わが国でも SPD や KPD についての研究はかなりなされてきているように思われるが、しかし USPD についての独立した研究書となると、少なくとも門外漢に近い私の知る限りでは、殆どないように思える。私がこの本の紹介を思い立ったのも、そのように「継子扱かい」(H. クラウゼ) されてきた党に対する私個人の単なる知的関心に依るところが大きい。しかし他方では、ドイツ革命というものをローザ・ルクセンブルクやあるいはコミンテルンを軸にして自己のものとしていくことへの素朴な疑問が、私をしてその第一ステップとしての USPD 研究へと向かわせたのだとも言える。しかしいずれにせよ、ドイツ革命関係の専門的知識に欠けるものの紹介であるため、訳語の適格さを欠くところも多々あると危惧するが、あえて資料として紹介しようと思う。更に、今後、事情が許すかぎり、本文部分についても、継続してこの場をかりて紹介していこうと思う。また訳注については、今回は訳者の力量や紙面の関係もあり、最小限度にとどめたが、今後は一層改善していきたいと思う。

なお、これを紹介するに当っては、金沢大学法文学部、文学研究科（ドイツ文学専攻）の田村光彰兄をわずらわせて、翻訳上の貴重な助言と御教示をいただいた。ここに書きしるして感謝の意を表したい。

1

ドイツの労働運動の歴史に従事した研究の中では、最近の20年程の間に、11月革命およびヴァイマール共和国の終焉の問題について、かなり実りのある処理方法が見い出されてきた。これに対して党研究の次元では、少なくともこれを20世紀の前半部に限定するなら、今なお多くの問題が解かれぬまま残されている。もっともドイツ共産党の成立と発展とについては、DDR（東独）からの多くの刊行物と並んで、連邦共和国（西独）においても重要な仕事がなされ、主にその構造及び政治的実践の問題が変遷するイデオロギーの問題と同様、研究されてきている。そしてまたこの間、ドイツ社会民主党の歴史やその社会学的分析についても、それらと比較しうるような研究がなされてきた。

それにもかかわらず今日まで、ドイツ独立社会民主党の起源や生成およびその構造的特徴については、全般的な研究はなされていない。だから一般的な展望を得ようとする人は常に、かつて1921年ベルリンの USPD 出版によって発行された、それ故いわば党の公式の仕事とも言えるオイゲン・プラーガーの『USPD の歴史』* にまでさかのぼらなければならない。後になって二つ（そして更に11月革命以後は3あるいは4）の労働者党の並存という事態にまで進むところの古い社会民主主義の分裂の問題に対して、そしてまた同様に第一次世界大戦下における党組織の問題に対して、長い間概して、この本以外にはある程度資料にもとづいたような叙述はなかった。このプラーガーによって論争の書として書かれた本（1970年に Detlev Auvermann 出版により復刻され再び手に入り易くなった）は、勿論、種々の観点から見て、条件づきでのみ信用しうるものである。まず第一に、この本には殆ど出典挙示がなされていない。第二に、USPD の中央機関紙 *Freiheit* の編集長でもあったプラーガーは、いってみれば交戦中の戦友という立場で誓っている。そのため彼の USPD の成立についての叙述（それ故また第一次大戦下の社会民主主義の歴史）は確かに今もなお読む価値があるし、この本がなかったなら見つけ出すのが非常に困難であったような多くの資料も含んではいるが、しかし、この本は、資料などで隙なく整備された歴史研究の書である必要はなかった。第三に、公式の党創立以後の USPD の発展とハレへの道について書かれているこの本の第二部——それ程膨大などとは言えないこの第二部——は、たんに不完全（この本は1921年秋に完成したので）であるばかりでなく、多くの細かい点で補なわれる

* Eugen Prager ; Die Geschichte der USPD

必要があり、更にいくつかの点で抗論の余地がある。プラーガーは、彼がこの本を書くさい、自分が第三インターナショナルへの加盟をめぐる論争の最前線に立って、この加盟に対して闘い、ハレにおける決定を不運なものと考え、その後も一層、統一ドイツ共産党に対して反対の立場をとっていたジャーナリストとして、この本を書いたということを、隠しだてしない。こうした観点から、彼は、歴史的考察にとって意味があるような多くのことについて言及しないまま放置している。その上彼はいくつかの点についてそれを歪曲しているし、またそこで証明された若干のものについてもこれを誤って解釈している。

USPD の成立と消滅について、そしてそのイデオロギー的な立場やその政策やその組織的構造とかについて、たとえ（大なり小なりの範囲内で）これらに言及するような諸対象が、労働運動の歴史に対する研究の中で、論究の対象とされてきたとしても、USPD の諸問題に対する新しいドイツ語で書かれた特殊研究は刊行されていない。だから土のような研究は、戦前の社会民主主義についての特殊研究と同様、以下の大まかな研究紹介からは意識的にはずさされている。ただし、それらが USPD の直接的な問題に言及している限りで、それらは本文のそれに照応する箇書で書き留めておいた。

これに対してアカデミックな領域では——特にイギリスとアメリカにおいて、その上東ドイツにおいても——学位論文という形で、USPD の特殊的あるいは一般的な諸問題についてかなり膨大な研究がなされている。これらの研究が今後の研究に対してもつ意味について若干述べておこう。今までのところこれらの論文のどれも本としては刊行されていない*。

2

1958年にA・G・ライダーは「独立社会民主党とドイツ革命、1917～1920」**、という論文をロンドン大学に提出した。国際管理理事会の所属機関の一員として2・3年間アメリカの占領地区で過ごし、まさにその時に資料を収集したにもかかわらず、ライダーは非常に貧弱な資料によってしか自分の立場を支えていない。すなわち彼は、党大会の議事録以外にはもっぱら既刊の追憶集とか回

*（訳注）以下でクラウゼにより紹介されるモルガンとウィーラーの論文は既に本として出版されている。もっともウィーラーの論文は、ドイツ語訳はでているが、オリジナルなものは未だ出版されていない。

** A. J. Ryder; The Independent Social Democratic Party and the German Revolution 1917-1920.

願録とかにしか頼っておらず、彼がこの仕事をしている時には未だ生きていて彼が訪ねることが出来る地区にいた USPD の役員——ペーター・ベルテン、ベルタ・ブラウントール、クルト・ガイヤー、パウル・ヘルツ等——にインタビューすることもしなかったし、アルヒーフの資料やその当時刊行された社会民主主義者の国会フラクシヨンの議事録とか連邦議会の速記録といったものも取り入れていない。そしてライダーにとってそこでの展開は、彼が取り上げた何年かの間で USPD がますますボルシェヴィキの意味におけるプロレタリア独裁という概念へと移行していき、民主主義という概念を見すてたように叙述されるのである。

「これ（この研究）は、初め民主的な社会主義政党として出発したにもかかわらず次第に、こうした民主主義的傾向が党の社会主義的プログラムを実現するために障害になるとの信念のもとに、その民主主義的傾向を捨て去り、最終的には、共産主義者のそれと区別されないような独裁というドクトリンを受け入れることになった一つの党の物語である。」(p. vi)

この彼からの引用文が要約しているように、ライダーは (p. 391) 1920年まで進行した USPD の「レーニン化」について述べているのであるが、しかしこうしたテーゼは、たとえ人がいかように USPD の中で流布していた種々の独裁概念を解釈しようとも、そのような形式においては保持されることはできない。これへの反証としてはただ一つの例を挙げるだけで十分だろう。すなわち、最初はケーニヒスベルクの、そして後にはライプチヒの編集長であったカール・マルチオニーニは、その何版も版を重ねて出版された独裁についての文書* によって、おそらく最も USPD の役員達の間独裁概念を広げるのに貢献したのであるが、にもかかわらず彼は、ボルシェヴィキに対しては徹底的な反対者であり、共産主義インターナショナルへの加盟を拒否し、死ぬまで社会民主主義者の *Leipziger Volkszeitung* の編集長としてとどまったのである。だからライダーが、ハレにおける決定を、2年以上も前から——ということは1918年の11月革命以前ということであるが——進行してきた一つのプロセスの論理的頂点との関連で語る場合、それはせいぜい、それを説明するような何かが起こるのは、何か既に起こっていたからだというモットーに従っているにすぎない。だが、こうした展開のプロセスは、——後に示されるように——決

* (原注) Warum Diktatur des Proletariats (Verlag der Leipziger Buchdruckerei, Leipzig, 3 Auflage, 1920)

して論理的にまた歴史的必然的に進行したのではない。そしてこれについては、すでに第三インターの第二回大会の討議資料が非常にあからさまに示しているところである。

ライダーのテーゼは、彼がそれを使って研究を進めている限られた資料からも、全く恣意的に引き離されている。だからおそらく、1945年以降のライダーの政治的経験、そのなかでも特に西ベルリンでの経験が、たんに、彼が言っているように、かれの関心を独裁という問題設定に対して目覚めさせたばかりではなく、そのそもそもの初まりから彼の研究方向を刻印しそこから出されてくる結果をも前もって規定していたというように推測してもよいだろう。しかしこうして得られた結果は決して正当なものではない。そしてたとえ人が、1920年に KPD に加盟していった USPD の部分を、党全体の中で指導的な断固たる部分だったとみなすとしても、——これは勿論間違っているが、ただしかしこうしたことがライダーの構想一般をはじめて議論に価するものとすることができるのだから——、その際には更に、何故この「新共産主義者達」（かれらは当時の議論の中ではしばしばこのように呼ばれていた）の大部分の指導者達が、1921年の3月行動*の結果、共産党から離れて USPD に、いや SPD にさえ戻っていったのかということに対して、なんらかの説明が捜されねばならない。それでも人がライダーのように USPD の指導者と共産主義者の指導者との間の区別を認識しえない場合は、人は、たんにそのような指導者達の折にふれての発言の中にばかりではなく、少なくともそれと同じ程度に、具体的な日常的実践の中にも、それらの区別を立証するものを探す必要があったのだ。このことをライダーはしていない。彼には、それがあつたならば USPD 内部の諸潮流を識別しえたであろうような区別の基準が欠けていた。そして彼がそれらの諸潮流を明確に区別しなかったということが、彼をして、USPD には一つの明白な戦線の移行すなわち民主的・社会主義的な党から疑似共産主義的な党への移行しか生じなかったという結論 (pp. 305, 389) へと導いたのであつた。

USPD について 1945 年以降に試みられた最初のこの大きな研究は、問題を解くというよりもむしろ未解決のまま放置してしまっている。そしてまた、こ

* (訳注) これについては、この行動へと導いた「攻勢理論」とともに、中村丈夫編『第三インターとヨーロッパ革命』(p. 329以降)に当時の資料が収録されている。また B. ラジッチ, M. M. ドラチコヴィチ著(菊地昌典監訳)『コミンテルンの歴史』(p. 357以降)参照。

の論文によって、そこでのテーマを更に考察したり、あるいはそれに手を加えてみたりするという気にさせられたと述べる人は、殆どいないだろう。いずれにせよ、以下で論じられる諸研究の文献引用のところで、この論文への言及は見い出せない。

3

ライダーの後、10年以上もたってカンサス大学(カンサス州・ローレンス)のクルト・D・フィリップが彼の論文「独立社会主義者によるドイツ支配の試み、1918年11月—12月」* を作成した。そこにおいて彼は、*Vorwärts* と *Freiheit* の内容及びその編集方針を比較し、これらの新聞論調にそれ以外の手に入り易い資料を対照させ、党の公式の機関紙がその党(あるいは党指導者)の政策を、一方においては、反映していたのかどうか、また反映していたとすればどの程度まで反映していたのか、更に他方においてはそれがそうした政策を担うのに役立ったのかどうか、またどの程度に役立ったのかという問題に対して、特にそれを追思推している。そしてその限りでは、彼がつけた上のタイトルは、この論文が実際に行なったこと以上のものを期待させている。フィリップの主要なテーゼは以下のように読める (p. 3)。

「USPD は、その指導者達が決定的な瞬間に無能であったが故に失敗した。その上この党は、その最も影響力をもっていた新聞である *Freiheit* に対して編集上のコントロールを行ないえなかった。その結果、この新聞は、国民議会の選挙とかドイツの戦争犯罪とか工業の社会化といった論点に対する党の立場への誤ったイメージをつくり出してしまった。」

このテーゼの前半部—— 党の指導が殆ど貫徹されなかったということ—— は確かに正しい。そしてフィリップもこれを証明するのにいくつかの教訓的な例を挙げている。特にそれを特徴的に示すものとして、1918年11月3日** に、党の議長がベルリンに居ることの重要性が十分に認識されず、ハーゼが、そ

* (訳注) Kurt D. Philipp ; *The Independent Socialists' Attempt to Govern Germany. November-December 1918.*

** (訳注) 篠原一『ドイツ革命史序説』、安世舟『ドイツ社会民主党史序説』等での記述では、ハーゼがキールに行ったのは11月6日以後であるとされている。そしてベルリンで革命が始まるのは9日であり、その時ハーゼは確かにベルリンには居なかった。

で権力を自己の手中におさめていた水兵達を慰めるためキールに出かけていったというあの有名な事実が執拗に引き合いに出されている。すなわち、この党の指導部は、今始まりつつある革命的情况を見ないで帝政の安定を信じていたのだ。しかもこうしたことは、単に瞬間的な誤った認識などではなく、どのような形でつくり出される革命であれ、それへの準備が党指導部の日々の課題とはなっていなかったということ、そしてまた、決定的な政治的変革の後にはそれでは何が問題であり何が課題として生じるのかといったことがここでは殆ど慎重には考えられてはいなかったということを示していた。一般的にいつでも10年以上も既成の秩序を廃止することに関わってきた後なら、誰でもその日がやっとやって来たということが、しかもこの変化した情況に対して何も用意ができていないということが判って当然だったのだが、実際はそうでなかった。もしも人が、11月9日と10日に、二つの労働者政党の間で行なわれた交渉——これについてはフィリップが上手に説明しているが——を一層詳しく見るならば、この革命の日々が概して救いようもない情況を、まさに無計画さという情況をつくり出したということを看過ごしにはできないだろう。そしてこうしたことは、まさに USPD の指導にとって特に当てていた。しかしそこに生じた「崩壊」に対し無力にただ向かい合っているだけの党指導部などというものには、それに従う人々の指導もいわんや膨大な未組織の大衆の指導も不可能であった。

多くの理由からフィリップのテーゼの後半部分は大いに問題のあるところである。ここからはさらに大きな疑問へのきっかけが与えられる。国民議会と軍国主義と外交と社会化という四つの問題領域に関わるフィリップの叙述からは、多数派社会民主党の党指導部と中央機関紙は1918年の11月と12月に、USPD においてみられるよりもはるかに一致団結して余り動揺もなくかれらの政治的立場を主張していたということが、不可避免的にその結果として生じてくる。しかしこのことはことさら驚くには当たらない。すなわち、人は、その結果中央機関紙の編集が直接に党の幹部の下に置かれることとなったあの *Vorwärts* Raubes の歴史を思い出さずすればそれで十分だろう。*Vorwärts* の編集長だったフリードリッヒ・シュタムパーと SPD の党幹部の間では、たとえ（例えば1918年1月の軍需品製造労働者のストライキの際に見られたような）偶然的な戦術上の食い違いがあったとしても、概して党の基本的な線については完全に一致していたし、とくに革命の初期の何ヶ月間はそうであった。だが USPD はこれとは全く異っていた。この党は、これは特にその創立大会の議論において強調

されたことであるが、党の支配からの党紙の独立ということを原則として掲げており、それはそれ以後忠実に守られてきていた。党議長のハーゼと *Freiheit* の編集長のヒルファーディングの間ですべての重要な問題において完全な意見の一致があったということも、党の中央機関紙における意見の自由を保証するというをななら変更するものではなかったし、その結果、編集部の見解とは異なる意見も発表を許されていた。そして多くの問題について USPD の中央部においてもまたその機関紙の編集においても意見の相異は常にあった。

こうしたこと以外に、この *Freiheit* の編集部による意見の公表を正しく指導しなかったということに関してのフィリップのテーゼは、次のような注意を払われるべき暗黙の前提に依拠している。すなわち第一に、USPD はその公式の見解の中で、ということは究極的にはその中央機関紙である *Freiheit* の中でということと同じであるが、そこで自分自身を表明しているはずであり、これ以外の出版物は、これに対してたんに従属的な役割を果していたはずだということ。第二に、党指導部の考えとか関心といったものを無条件にそして一貫して表明するような報道機関のみが政治的にアクティブな行動を可能にすることができるのであるということ。第三に、人民委員協議会 (*der Rat die Volksbeauftragten*) の USPD の三人の代表者達——ハーゼ、ディットマン、バルト——は、たとえそれが実際には党全体ではないとしても、全体的な党指導のイメージを一致して代表していたはずであったということ。この三つである。

もしもこうした前提が適格なものであり、USPD の人民委員協議会の見解と中央機関紙において表現された意見との間の非常に明確な相異というものが確立されるならば、上のフィリップのテーゼを反駁することはきわめて困難になるかもしれない。しかしながら、フィリップが明確に定式化もせずまた全然証明もしていないこうした諸前提は、まさに他人の批判を招くものである。

まずかれの第一の前提について。フィリップにあっては、他の USPD の新聞（とくに、非常に古くからあり伝統もある国際的にも有名だった *Leipziger Volkszeitung** など）についての言及が全くないが、しかしまさにこうした新聞こそが、戦時中は唯一の反対派の新聞であり、ドイツのみでなく広くかれらの平常の地域的広がりを超えて購入され読まれたのだった。だから、そのサブ

*（訳注）ちなみに修正主義論争の口火ともなったローザ・ルクセンブルクのベルンシュタイン批判『社会改良か革命か』が掲載されたのも（第Ⅰ部、1898年9月、第Ⅱ部、1899年4月）この新聞であった。

タイトルでは原則的な吟味から意識的に「USPD のベルリン機関紙」とは名乗っているが、「中央機関紙」とは名乗っていない *Freiheit* に対してだけ、フィリップが自分の研究の中で排他的に自己を限定しているということは、それなりの理由と十分な証拠による証明が必要だったというべきだろう。

フィリップの第二番目の前提に対しては、この私の叙述を進めていく中で更にそこへと立ち戻ることになるだろう。ただこれはフィリップの考え方の基礎にもあることだが、一般的に政治的な意志形成過程の構成に際しては、諸々の変革とか政治的な進路の変更や政治的大衆行動といったものが、そしてまた既成の諸関係やあるいは変化しつつある諸関係への反応といったものが、「上から下へ」と下ろされていく場合にのみ、それら全体が理解可能である、というようなことが、あらかじめ全く一般的に言われるに違いない。しかし USPD の念頭にあったのは、これとは全く逆で、労働者の出版物というものは、その時その時の党指導部のたんなる代弁者などではなく、原則的でしかもまだ全党的には決定されていないような諸問題に対して、その可能性や効果を議論するための開かれた場でなければならないということであった。そしてこうしたことは、USPD という連合的な構造をもった組織を考慮するなら、自明であるような議論の余地のない要求であった。それ故、党の出版物は「上から下へ」と向かうことは許されなかった。しかし、そのような上から下へということがそこでは許されておらず、また初めからなかったということから、党の中央（あるいは USPD の人民委員達）と *Freiheit* の編集部とは無条件に異った立場を代表していたに違いないと結論づけることは許されない。どのような意見の相異があったのか、そしてそれはどのような結果をもたらしたのかということが、その時々に応じて正確に吟味されるべきであった。ヒルファーディングの（大概の場合は匿名で出された）編集長としての発言が、もし個々の点で、政府内でのハーゼの発言と全く同じであったとしても、それが党の議長にとってその仕事を進める上での貴重な思考の助けを提供しただろうなどということが、ありうるだろうか。更にまた、政府の中にいる USPD の党員達が、「右派社会主義的」な閣僚との共同作業が原因で、党の「その」方針から離反し、党の新聞の批判的な注釈によって再び党の方針に戻られねばならなかったということが考えられるだろうか。確かに種々の相異はあったが、しかしそうした相異は、概して、人民委員と党機関紙の編集部との間を引き離したのではなくて、人民委員のハーゼとディットマンを同じく人民委員のバルトから引き離したのだった。

人民委員と *Freiheit* の編集部との間に、外交とかドイツ帝国の戦争犯罪という問題で意見の相異があったなどということは、全くのおとぎ話の領域である。事実これらの問題においては、ハーゼもティットマンも *Freiheit* の編集部によって指示された方針をすでに旧帝政議会において教示していた。社会化の問題においては、ヒルファーディングの側とハーゼとティットマンの側には概して相異はなかった。ただバルトのみがより攻撃的な政策を要求していた。だから *Freiheit* 編集部の社会化の要求が、USPD の人民委員をして多数派社会民主党の閣僚たちとの自分達の意志にそぐわない抗争へと馳り立てたなどということは、およそ一度たりともありはしなかった。国民議会の選挙に関しては、党の新聞と党の指導部とは、国民議会の召集が第一回のレーテ代表者会議で大多数の人々の賛成で決定された後は、一致して投票日の延期に賛成していた。*Freiheit* の編集部が、政治的危機を解消させるという動機からこの投票日の延期を受け入れたなどということは全くの思弁の産物であって、なんの根拠にもとづいていない。これらすべての問題においてフィリップは全く幻想にとりつかれている。

第三の前提について。フィリップは、人民委員政府がつくられる時に生じた諸問題に対してどのようにして決定が下されたかということを非常に巧みに叙述しているが、そこからは、USPD の中央委員会内部の様々な考え方がこれ以上望めない程あからさまに浮きぼりにされてくる。たしかにこの新しい党の中には種々の政治的主義・主張が集められており、このことは党の指導者達が再三再四、どの程度まで自分達の政治的方針が党の多数によって担われているのだろうかと問わねばならなかったということの意味していた。人民委員協議会においては、ハーゼとティットマンが種々に色づけされた党内多数派の立場を代表し、バルトは党内少数派の代弁者として現われていた。しかしこれら三人の人民委員を全部合せても、党員の全領域を代表してはいなかった。その上、かれらによって代表されていない潮流に対しては *Freiheit* の編集部もそれを弁護することができなかった。こうしたことすべては、これら以外からの率直な批判が党の統一を形づくる要素とならねばならないということの意味していた。このバルブが機能を停止してしまったら、党は崩壊してしまっただけに違いない。

もしも、フィリップの分析がそこから出発している諸前提が与えられていないとするなら、かれの結論は現実の関係をゆがめてしまうに違いない。確かにフィリップは、何故 USPD の指導というものが行なわれなかったのか、また

どうして USPD は徐々に行動能力を喪っていったのかという問題を 正当にも立ててはいるが、しかし彼はこれらの間に満足には答えてはいなかった。しかしそれでもなお、フィリップが収集した資料は、たとえ政治的実践における意見や意志の形成過程に対するかれの考え方が USPD にとって特徴的であったものを全く無視していたとしても、われわれに一つの資料集以上のものをもたらしてくれている。

4

1970年にピッツバーク大学においてロバート・ウイラーの論文「独立社会民主党とインターナショナル——ドイツにおける社会主義インターナショナルイズムについての考察、1915～1923——」* が出された。この800ページを超える労作は、党内論争の中からたった一つのテーマ、すなわちインターナショナルの問題を引き出している。その前書きからも明らかのようにウイラーは、確かにそれ以外の問題——労働組合、議会主義、レーテ——も USPD の発展と分裂とに重要な意味をもっているとはするものの、USPD はこれらの論争点によって分裂したのではなくて、あれかこれかのインターナショナルな組織への加盟の問題によって分裂したのだということを確信している。だからこれがウイラーの中心的なテーマである。これを徹底的に論じることを可能にするため、ウイラーはヨーロッパ中を歩きまわり、種々のアルヒーフから今まで公開されていなかったり、あるいは長い間行方不明になっていた資料を探したそうと努めた。そしてこれを彼は驚くべき程成功させている。特に彼が、党指導部の諸委員会の議論ばかりでなく、一番底辺の、いってみれば末端の議論をも網羅しようという意図で地方の新聞を見つけだし、それを徹底的に利用しようとしている努力こそは、前代未聞の丹念さと、それ故まさにどんな小さなことに対しても注意深い理解が示されているということの証拠だと言える。ウイラーは、まだ生きている沢山の昔の党員を訪れたり、更にほんの短い時期しか発行されなかったような些細な党の新聞をもとり寄せている。これ程巾広くしかも鋭い観察をもった描写は、彼以前にはどんな USPD 研究者も提示しなかったものである。

ウイラーは、第一次大戦中の諸議論やツインマーバルトやストックホルム

* Robert Wheeler ; The Independent Social Democratic Party and the Internationals : An Examination of Socialist Internationalism in Germany, 1915 to 1923.

の会議での議論から出発して、労働者党の強力な国際的な組織を戦後の状況下でいかにして組み立てるべきかという問題をめぐる論争にいたるまでの、大きな構想を立てた。USPDの誰をとってみても、個々の党の国家的利害に抗しきれなかったため1914年8月に悲惨にも崩壊していったあの第二インターの組織的な伝統に対しては、それと結ぶことが意味があるとは考えていなかった。1919年にベルン* やルツェルンやその周辺で開かれた会議での議論；第二インターを新しく生き返らせようという努力；第三インターの創立を急いだためにそこから生じた新たな問題群；1920年秋の分裂後、ウィーン(第二半)インターナショナル** の創立によって生じた新しい状態；こうしたことすべてをウィーラーは、歴史的関連と政治的な横断的(空間的)関連の中で取り扱っている。そして更に、こうした発展——その中でも特に第三インターの——にとってそれが意味をもつかぎり、ウィーラーは他のヨーロッパ諸国における議論に対してもこれを跡づけ、種々の記録などにより説明している。そのためここからは、USPDの内部での諸々の論争とか路線闘争が、細かく区分けされた叙述により明確な姿をとって現われてきている。特にこのこととの関連で言えば、USPDのインターナショナルな組織への加盟をめぐる、一方では革命的展開を一糸乱れず他の国々とも同列に並んで厳格に追求していこうとするものと、他方では有利な加盟によって党の国家的な自主性を放棄しないようにしようとするものとの間での、それらの具体的な目的設定の違いによる抗争を扱った章は圧巻といえる。殆どすべての人達は、第二インターの種々の機関からその行動力を奪ってしまったあの全くルースな連合的な構造を再度復活させるべきではないということでは一致していた。しかし、どのような資格でインターナショナルな組織に入るべきかということについては、決して明らかにはなっていなかったのである。

ウィーラーは、彼の効果的な資料研究のお蔭で、インターナショナルの問題をめぐる党内論争の接点に立って、そこでの議論を臨機応変にその末端にまで入って行ってそれを再構成することができた。こうした方法によって彼は、

* (訳注) コミンテルンから「黄色インターナショナル」と名づけられた一連の第二インターを蘇らせようという試み。(cf. J. デグラス編『コミンテルンドキュメント』I, pp. 30~34)

** (訳注) この組織はプロレタリアート独裁、レーテ制度等を綱領に掲げているが、コミンテルンの21ヶ条の加入条件に反対しているため、第二インターと第三インターの中間、即ち第二半インターと呼ばれる。ドイツからは、分裂後もUSPDに残った部分(ヒルファーディング、レーデブーア等)が参加した。

USPD の内部で念入りに作られた（あるいはそれ以前に既に作り上げられていた）多くの考え方を、いわばその生じてくる所において手中に入れたのである。そしてこのことは特に、ルツェルンの会議の準備にさいしての議論（pp. 303 ff.）、1919年12月のライプチヒ党大会に向けての議論（pp. 378 ff.）、そしてウィーラーが最も完成した叙述を行なっている第11章「論争と分裂」（pp. 642 ff.）で描写されているあの第三インターへの加盟をめぐる最後の闘いについての議論等について当てている。党内では——党の下部組織においても同様——1920年夏の共産主義インターナショナルの第二回世界大会* 以後特に、意見の対立は深刻であった。USPD の構成が、その創立党大会からハレでの分裂の時までずっと異質のものの寄せ集めであったため、地域的にはもとより地方的な事象に対する正確な知識なしには、1920年の夏から秋にかけての種々の党内外の政治勢力によるいわば党の引っぱり合いとも思えるような試練に対し、確実に再検査に耐えるような評価を下すことは不可能である。たしかにウィーラーの地方紙についての報告とても、時には増補版が必要なのではないかという印象を与えはするが、しかし、地方の原資料がどの資料刊行においてもまたどの地方研究においても選鉱されてきていない限り、この彼の手法は、人が一般的結論に到達しうる唯一の道である。

こうした観点から見ると、先にも触れた「論争と分裂」という章は賞讃に価するものである。そこにおいてウィーラーは、USPD のすべての地方印刷物では様々な声や意見や決議がどのように叙述されているかを報告し、党の状況についての総括的な洞察を得ようと試みている。そして第三インターへの加盟の出発点及びそれを認めることになった動機についてウィーラーが立てた仮説（pp. 773-747）は、いわば実物教授法の上手に選び抜かれた材料とも言えるものによって基礎づけられたものであり、このテーマについて今まで云われてきたものの中で最も正確に基礎づけられたものであることは、全的に確かなことである。

そしてそこからウィーラーは、第三インターによって意図され計画されたUSPD の分裂は、単に党としてのUSPD に対してばかりでなく、まさに社会主義的なイデーに対して決定的な敗北をもたらしたという彼の論文の主要テーマを展開させている（pp. 641, 797）。このテーマは納得のいくように叙述され

*（訳注）この大会に派遣されたUSPD のクリスピエンとディットマンがここで提起されたコミンテルンの21ヶ条の加入条件に強く反対したことはよく知られている。なおこの21ヶ条の加入条件については、J. デグラス編、前掲書（pp. 145~150）参照のこと。

多面的に証明されている。そのため共産主義インターナショナルの政策に対する批判は外在的批判のようには見えない。それは一步一步諸々の事実を明示し、そしてそれらの関連を明らかにしながらすすめていく。すなわち彼は、諸論争を復元することと事件があった所での行動の描写との間を常に行き来し、更には、党中央の決定や行動の解明と非常に正確なインターナショナルの問題についての党大会の議事録の分析との間を同様に行き来し、直観的にはこのほかに必要なものは殆どないように見える研究を、あたかも一つ一つ石を組み込ませてモザイク細工を作るようにして、仕上げていく。だがたしかに人はおうおうにして、このインターナショナルをめぐる確執についての資料が、その全関連領域から膨大に資料収集されているのを見ると、このインターナショナルへの加盟をめぐる闘いになんの影響も与えなかったわけではないような他のやはり USPD の存続に関わる重要な問題についても、詳細に論じてはしかなかったなどと不遜にも思うものである。だが「USPD とインターナショナル」という問題に関しては、いずれにせよこのウイラーの本は、これから将来、まさに模範とされるべき研究となるだろう。*

5

アメリカの若い歴史家のデヴィッド・W・モルガンは、1969年に「ドイツ独立社会民主党、1918～1922」** という論文を完成した。彼はこの論文でセント・アントニーカレッジ（オックスフォード）で学位をとったのだが、それは草稿の時点では「左派社会主義とドイツ革命——ドイツ独立社会民主党の歴史、1917～1922——」*** というタイトルをもった実質的にはもっと大きな草案からなっていた。そして近い将来に、本として（そのためまたおそらく短縮されるだろうが）アメリカ合衆国において出版されるはずである。****

*（原注）ウイラーの本は、1975年にドイツ語に翻訳されて Ullstein Verlag から出ている。

**（訳注）David W. Morgan; The German Independent Social Democratic Party, 1918～1922.

***（訳注）Left Socialism and the German Revolution. A History of the German Independent Social Democratic Party 1917～1922.

****（訳注）これは、1975年に Cornell University Press から以下のタイトルで出版されている。The Socialist Left and the German Revolution—A History of the German Independent Social Democratic Party 1917～1922—

モルガンに対しては——ウイーラーに対してと同様——西ドイツの国立の資料室や党のそれが開放されていたし、その上無意味ではない程度に東ドイツのそれらも開放されていた。そのため、この二人の著者の手による効果的な資料研究は、USPDの歴史を研究するためには大きな意味をもっている。かれらの原資料を基礎にした研究は、ある意味では先駆的業績といえる。かれらの研究は、たんに国立の資料室の徹底的な調査（たとえば警察の報告書の類まで）ばかりではなく、そして更にたんに記録とか遺稿とか手紙とか党大会議事録とか議会速記録といった顕微鏡的とも思えるような資料研究ばかりではなく、とりわけ当時の新聞とか定期刊行物についての効果的な研究をその基礎にしている。このことは、そこでの政治的発言を当時の出来事の助けをかりることによって再吟味することを可能にしてくれるし、また当時の議論も当時の資料をもって証明されるのである。*

モルガンは、このタイプライター原稿で殆んど800ページにもものぼる論文の中で、二つに分けられたしかし互いに関連し合っている問題を目標として設定している。一つは、ヴィルヘルムの君主制からヴァイマルの共和主義的民主主義への転換における社会主義の影響を正確に調べるということであり、二つには、どの程度にまで戦争と革命とがドイツにおけるマルクス主義思想というものに対して影響を与えそれを変えたのかということをはっきりとすることである。そしてこの二つの問題領域の交点を、モルガンは、USPDの中に見ている。だからかれは自分の主要なる着眼点をUSPDの歴史の叙述というところに置いているのである。だが、この第二の問題領域については、それがUSPDの発展の中へと直接には影響を及ぼしていない範囲については、いまだ露出不足のまま残されている。

モルガンは、戦前の社会民主党の左派からUSPDの創立にまで、そして更にUSPDを越えてドイツ社会主義労働者党(SAPD)**にまでつながる線を引き出している。そのため、たとえUSPDが時としてその分析の中心に置かれているとしても、モルガンは、SPDやなかんずくKPDにおける諸変化をも彼の研究の重要な言及箇所において捉えている。それ故この彼の労作は、そ

* (原注) ウイーラーもモルガンもこのことを余りにも一貫してやりぬいた結果、かれらは、自分達がそのオリジナルな形で利用した資料を、もっと手に入り易い資料刊行の形で再版するように指示するのを、時々は怠ってしまった程である。彼らの後につづくものにとって、これは、そこでの報告を再吟味することを制限しているものである。しかしこれは容易に正されるであろう。

** (訳注) 1932年にパウル・フレリッヒ等の指導の下に創設された組織。

の豊富な細部に亘る分析にもかかわらずそれだけにはとどまらず、全体的な関連に対する目を保持しつづけているのである。

モルガンの特別な関心は、USPD の歴史に対する今まで忘れられていたような、あるいはアルヒーフからも洩れているような諸事実、たとえば USPD の支持者の非常にハッキリした地域的分布であるとか、あるいはそこにおいて党の活動が展開された種々様々な行動領域であるとかについて、そうした事実を再構成するという事に向けられている。そしてこれとやらんでモルガンは、指導的な党役員達がそこまで成長してくる過程に対しても、それを正確に分析することに大きな価値を与えている（かれの作成したかれらの伝記 pp. 860 ff. は多くの重要な情報を提供してくれる）。その際とくに彼は、かれらが労働運動の相異った諸党派からここへ入ってきたその経歴について、注意を払っている。そしてこのことは、その伝記からの非常に巾広い記録により説明されている章「USPD の内的ダイナミックス」(pp. 87~108)の中で印象的に示されている。

それにもかかわらず、この細かな事実を収集するという注意深くかつ苦勞の多い仕事は、時とすると、その社会的・歴史的な背景を隠してしまっている。すなわちモルガンは、指導的な党役員達の様々な経歴——そしてまた反対派や後の USPD の様々な重要人物達——について、これを何はさておきその時その時の個別的情况から説明し、たとえばウィーラーがハレでの決定を説明するために試みたような、そうした個別的情况をおおっている社会的構造にまで立ち帰ってそれを捉えるということには、余り重きを置いていない。その結果、様々な種類の伝記的資料や新しい党での指導的人々の配置といったものがおそらくそこへと還元されうるのであろうような構造的メルクマールというものが、たいていは空白のまま残されてしまっている。そしてこれは、モルガンが、例えばジェラード・ブライの労作『ドイツにおける賃金』*（プリンストン大学出版、プリンストン、1960）を、その基礎にしている『ドイツ国家統計年報』からの大部分の資料と同様、殆ど利用も評価もしていないということに、典型的に現われている。しかしかれの情熱的とも思える徹底さについて考えるなら、もしモルガンが社会的-経済的構造に関わるデータについても十分な考慮を払ったなら、このそれでなくても元来膨大な量になっている彼の作品は、完全に大きくなりすぎて破産してしまっただろうということをおそらく人はモルガンに対して考慮してもよいであろう。

*（訳注）Gerhard Bry; Wages in Germany

モルガンが USPD の歴史について書いたいくつかの異稿における主要なるテーゼの一つは結果としては、1920年10月のハレでの分裂が——長い目で見ると——一つの社会主義革命* を不可能にしたのだということになる。モルガンの考えでは、一つの社会主義革命への道が、USPD の重要な部分がハレでの分裂の後、反対党である KPD にくら替えしていったということによって遮断されたというのである。すなわちこの分裂の結果、残された USPD 内ではプロレタリア的な行動力をもった核が衰え、そしてこのことがたんに政治的な職務遂行の面ばかりでなく、党の日常的な実践の面にまでも種々の結果を惹き起こし、その結果、古き社会民主党に對抗してそれとは異なる社会主義的な道を選ぶということに対して、そこへの水路が断たれてしまったというのである。たしかに人は、1920年の半ばまではまだ USPD というものが、その当時まで未組織であったプロレタリアート大衆の巾広い部分を組織したり、また多数派社会民主党の党员やそこに投票する人達の一層巾広い領域の中に入り込んで、労働者階級の党としての長期的展望の中でかれらを取り戻したりすることができるというところから、出発することが可能であったかも知れないが、しかしこうしたチャンスはあの分裂とともに全くなってしまったと言えるだろう。最早、多くの労働者の意識の中で、多数派社会民主党こそがまさに唯一の非共産主義的な労働者党となってしまうわけである (p. 727)。

党の新聞や議会の議員団が提供していた党の外観は、この分裂した党の現実の状態よりもましであるようには見えたが、しかし左派の大きな部分が分裂していったということは、この党をたんに量的に弱体化させただけではなく、たとえあのハレでの分裂において主役を演じた人々が1921年から22年にかけて「落伍者」として USPD に再び戻ってきたとしても、この党をまさにその核の部分において痛撃した。そしてそこでは、未組織の人々を動かすということもあるいは SPD や KPD へとくら替えしていった昔の党员達を引き戻すということも、最早考えられなくなったと言える。だからモルガンは、一層大きな展望をもってハレから1922年秋の多数派社会民主党との統一へと進む道——その中に彼が「古き党へ戻る道」を見るのは不当ではないが (p. 836)——をもそのすべての局面においてたどっていかうと努力している。すなわち一方では独立した社会主義的政策が阻害され他方では社会民主主義的イデオロギーと共産主義的イデオロギーとが盛んになるということ、この両者は同じく古い労働者政

* (原注) この言葉は「プロレタリアート大衆による権力の奪取」というローザ・ルクセンブルクの意味で理解されている。

党からの必然的な継承物と看做されるものであるが、このことの中に、モルガンはドイツにおけるマルクス主義の決定的な変質を見ているのである。しかしながら、この次元でのかれの観察方法は殆ど深められていない。

しかし、卓越した文献解題や1919年から21年にかけての重要な選挙についての精選された得票記録や一部の USPD の指導層をその中に捉えている内容豊かな伝記集や更には USPD の連邦議会議員の表や USPD の委員会の党員名簿といったものを備えたモルガンの付録は、彼がこの本の中で USPD の発展について描いてみせた輪郭に対しこれを肉づけし完成させるものである。そしてモルガンは (p. 848), もっともこれは口に出してハッキリと言うというよりむしろ行間において暗示していることではあるが、独立した社会主義的な政策を実現しようとする試みが、独立した党としての USPD の時代には十分に開花させられることなく、そしてまたその時代の前と後とでも古い寄り合い世帯的な社会民主党の懐で同じことを追求しようとしたあらゆる試みが挫折したということを考えるなら、USPD にとっては自分達の例題の検算をすることすらできなかったのではないか、ということ USPD にとっての個有な悲劇として見ていると言えよう。

6

USPD について、あるいは USPD の歴史と構造にとっての特殊な問題について、ドイツ語で書かれた本は、プラーガーは例外として、ない。しかしこの間連邦共和国 (西独) の大学においても若干の論文が現われ始めている。*

モルガンやウイーラーの仕事と平行して DDR (東独) においても USPD について若干の論文が出されている。そこで出された仕事の中では、SED の中央委員会に所属するマルクス主義-レーニン主義研究所のホルスト・ナウマン教授の論文が確かにまだ読む価値がある。1961年に書かれ今日に至るまで刊行されていなかったこの論文の中で、彼は「USPD の革命派達による共産主義イ

* (原注)

Guido Knopp ; Der Wiederezusammenschluß der SPD und der USPD im Jahre 1922 : IWK, H. 16 (August 1972) Nr. 1878

Günter Högel ; Die Entstehung und Geschichte der USPD im Spiegel der historischen Forschung : IWK, 11Jg., H. I, (März 1975), Nr. 2413

ンターナショナルへの加盟と KPD との統合とを求める闘い]* というテーマを取り扱っている。この著者が初めから USPD の左翼に自己を限定しているということ、かれの KPD の初期の歴史やあるいは KPD の起源についての並みはずれた関心とはともに、かれの党員としての意識の中で関連し合っている。この「党員としての意識」ということが現実に意味しているものは、そこで利用された資料に対して予めその評価とか枚挙とかが予定されているということのうちに示されている。すなわちそこで利用された資料の順番が、レーニン全集、共産主義インターナショナルの議事録や資料、SED の決議、ウルブリヒトによる歴史叙述というものがもつ諸課題についての基調報告、KPD や SPD の党大会の議事録、そして *Kommunistische Internationale* とか *Internationale* といった定期刊行物というようになっているのは、決して偶然ではないのである。

勿論このナウマンの研究の中からも、多くの有益な部分——とくに USPD の左派の地方ごとでの強さの違いなどについて——を借用してすることはできるであろうが、しかし、この著者による評価とかかれが一般化しようとしているテーゼの多くは、こうした党的な付属物によって刻印されており、そこからは非常に間違ったというよりまさに歪曲された像が成立してくる。そしてまたそこでは、USPD の内的ダイナミックスあるいはこの党の活力といったものは殆ど視野の中に入っていないのである。この著者の関心は、何故あのように多数の後の指導的共産主義者達が、1918年暮れの KPD(S) の創立大会の後、ただちに USPD から KPD に移行せず、そのかわりに USPD の内部でその左翼に位置し第三インターへの加盟のための闘いを指導したのかということについて、これを正当なこととして説明することに集中させられている。

ナウマンにとっては、以下のことを証明することが、なんととってもとりわけ重要なのである。(すなわち)

「USPD の革命的勢力が中間派** の指導部から分裂し KPD と結合したというこ

* (訳注) “Der Kampf des revolutionären Flügels der USPD für den Anschluß an die Kommunistische Internationale und die Vereinigung mit der KPD” (unter besonderer Berücksichtigung der Hilfe durch die Kommunistische Internationale und die KPD)

** (訳注) この言葉のドイツ語は Zentrum であり、「中央派」と訳される場合もある。しかし「中間派」と訳される場合も多く、ここでも一定の評価がこめられた使われ方をしているので、「中間派」という訳語をとった。

とは、労働者階級とともに、ドイツの帝国主義と軍国主義に対して闘っている国民大衆の立場の指導的部分を強化」したのだ。

だがこのようにナウマンは、「革命派」と「中間派」との間にはそもそもの始まりから鋭い対立があったとしているが、このような対立は、分裂していった USPD の 党員達がまさにそのことの故に革命的であった——そしてその逆についても——ということが言えてはじめて、具体的に見えてくるのであって、彼のようにそれをアプリアリに設定することは、種々の出来事の評価を、これから説明しようとする上に挙げたテーゼの意味の中でまえもって固定することである。しかもこのテーゼの正当性は、結果の中でわけなく「証明」されてしまうのである。このような構想で誓われたナウマンの著書は人を納得させることができない。

本来なら研究の結果として引き出されてくるはずのものを、初めから固定してしまうようなこうした党的付属物に対しては、いやおうなしに、原則的な異議申し立てがなされねばならない。そしてこのことは、地域的な USPD 研究に従事している他のまだ刊行されていない論文に対して、一層強くあてはまる。すなわちエーヴァルト・ブーフスバウムが1965年にハレ（ザーレ河畔）のマルチン・ルッター大学に提出した「1914年から1920年におけるゴータ労働運動での左翼の発展——USPD の左翼革命派の成立とその1920年12月の KPD との結合に至るまでの発展を中心にして——」* という研究に対しては、こうした一般的異議申し立てと並んで更に全く特殊なそれがつけ加わらねばならない。すなわちそこでは、ゴータにしかなかった唯一の事態——地方議会で USPD が多数派であった——を説明するために、ゴータの特殊的情况とチューリンゲンの他の全く異った発展とが関係づけられていない。また全体的な労働運動の衰退化という事態も、これは1919年と1921年のあいだのゴータの地方議会の選挙にもハッキリ現われているのだが、空白のまま残されている。しかしそれでは、1919年2月には USPD がまだ全投票数の圧倒的多数を自己のもとへと集めることが可能であったのに、にもかかわらず、1921年の3月には、SPD も USPD も KPD もブルジョアジーの奸智の前に打ち負かされてしまったこ

* (訳注) Ewald Buchsbaum ; Die Linksentwicklung der Gothaer Arbeiterbewegung von 1914 bis 1920 (unter besonderer Berücksichtigung von der Entstehung und Entwicklung des linken revolutionären Flügels der USPD bis zu dessen Vereinigung mit der Kommunistischen Partei Deutschland in Dezember 1920)

との理由は何だったのだろうか。こうしたことに一切触れずにここでは、ゴータからの派遣団の多数が共産主義インターナショナルへの加盟に賛成投票したというあのなんのとりとめもない事実が、全革命的運動の偉大な政治的成果として祝われているのである。USPDの全国大会においては、チューリンゲンからの派遣団の代表者達が、ゴータ人のもとで、この加盟に対しはるか以前からハッキリと常に明確な反対者であったというのに。

またヴァルターとエンゲルマンの手による、ルール地方の発展についての研究*も、満足すべきものではない。USPDの内部における諸変化や完成へと進んでいくその修業過程やあの急進化といった問題は、殆ど十分に顧みられぬまま残されている。USPDの党員を中間派と革命的で信頼できる大衆とに公式的に区分けするだけでは、これらの外見上は固定されている戦線間における種々の位置転換を考慮することはできない。その上ここには、ルールにその拠点をもっていたサンディカリストの全問題がつけ加わってこざるをえない。すなわちドイツ共産主義労働者党(KAPD)にとって有利であった条件とは何なのか、そしてまたそうした条件はルール地方における既存の特殊な社会的構造(たとえば高い失業率であるとか不熟練労働者の割合が高かった等々)と関連しているのかどうか、といった問題がつけ加わってこざるをえない。しかしながらかれらの研究では、そうした問があの政治的区分け(革命派と中間派)というあらかじめ固定されているシェーマ(構想)をおそらく突き崩してしまうかもしれないが故に、立てられていないのである。

7

第一次大戦におけるドイツの社会民主主義の分裂の問題に対しては、Drose出版(デュッセルドフ)から1974年にスザンヌ・ミラーによるモノグラフィーが出されている。「城内平和と階級闘争、第一次大戦における社会民主主

* (原注) Henri Walter und Dieter Engelman ; Zur Linksentwicklung der Arbeiterbewegung im Rhein-Ruhrgebiet unter besonderer Berücksichtigung der Herausbildung der USPD und der Entwicklung ihres Flügels vom Ausbruch des 1. Weltkrieges bis zum Heiderberger Parteitag der KPD und dem Leipziger Parteitag der USPD (Juli/August 1914 bis Dezember 1919), Phil. Diss., Karl Marx Universität, Leipzig, 1965.

義]* がそれである。そこではSPDの内的展開とそこにある種々なる潮流や諸グループといったものが——多数派社会民主党の後の発展を展望する立場から——十分詳しく調べられ述べられている。そしてその過程で、反対派の成立条件とかれらの1917年4月**に至るまでの構造と発展とについて、貴重な資料が収集されている。

その上ミラーは以下の試みを行なっている。

「時には、ここに収集された資料にもとづいて、そうした過去の出来事をその歴史的な制約性の中で研究しかつ叙述し、またこうした過去の先例を扱う人々の意図とか目的設定という観点から見たそれらの有効性であるとか、またその当時の種々の出来事の継続に対してそれらが与えた効果であるとかについても、それを指し示す」(S. 10) という試みを行なっている。

「それによって多数派社会民主主義者達が党内反対派とは逆に既成の秩序の枠内の潜在的な行政パートナーへと」(S. 9) になっていったあの1914年8月4日とあの明白な社会民主党の決定とに基づきながら、ミラーはこうした「犠牲」(苦痛を忍んで既成の秩序に捧げた贈り物)——ミラーはこのように言っているのだが——が、全体としてはむなししいものであったと評価している(S. 396)。そしてこれについては納得がいくように述べられている。というのは、多数派社会民主党が獲得したすべてのものは、その中でも特にブルジョア国家の承認や国会議員レベルでの委員会における協力や1918年10月の政権への参加及び同年11月のその引き継ぎ、といったことすべては、1914年8月4日の彼らの決定のために成就されたのではなく、すでに「第一義的に戦争状態」(S. 396)により規定されていたことだったからだというのである。そして確かにこれについては正確に観察されている。しかしにもかかわらず、社会・経済的枠組といったものを、ブルジョア的な諸党の内部状態と同様、空白のまま残しておくというこの研究における原則的な書き出し方については、問題がないというわけではないということが、ただちに指摘されるのである。

ミラーの詳細なこの研究は、その出発点としての1914年8月4日という日を慎重に選び出している。だからその際、かの女の主要な関心は当時の集会や会

* (訳注) Susanne Miller; *Burgfrieden und Klassenkampf. Die deutsche Sozialdemokratie im Ersten Weltkrieg.* (=Beiträge zur Geschichte des Parlamentarismus und der Politischen Parteien, Bd. 53)

** (訳注) 1917年4月にゴータでUSPDの創立大会がもたれた。

議や議論を隙間もない程ピッシリと枚挙してくることに向けられていた。確かに、戦時公債を拒絶したあ後の少数派が、かれらの政治的態度を国会議員団の中に貫徹させる闘いを進める程には断固としていなかったということは明らかである。だがこうしたことがその後の一般的に貫ぬかれていった発展傾向であったかどうかは、今後も追求されねばならないものとして残っている。党首脳部の中に二つの全く相容れない見解が存在していることがハッキリした後は、ミラーが納得のいくように証明しているように (SS. 55. ff.), 「左派」は「右派」とは反対に SPD の国会議員団全体の意志を決するような会議を殆どあるいは全く準備しなかった。だからそこではアンチ・ツアーリズムという動機が、国会議員団多数派の態度を説明する決定的要因としてなんの曇りもなく摘出されてくるのである (SS. 55, 71f)。しかしこれとは別に部分的にはあるが (SS. 68 ff.) 一つの論証方法が考慮されており、そこでは、心理的状态とか、民族的戦列につくことを通しての抑圧の見せかけの止揚であるとか、「支配的」体制への10年以上にわたる反対にもかかわらずそこに隠されていた愛國的な憧憬であるとか、(学校や軍隊や工場での) 長い間の教育によって身についた規律を尊ぶ精神といったものも、かれらの行動を決定する要因として十分取り上げる価値があるものとして位置づけられている。だがしかし、読者はこの論文から、政府の政策とりわけ、これについてはその序論的な概観の中 (S. 15) ではかなり明確に問題になっていたあの宰相ベートマン・ホルバークの技術的にきわめて老練で効果的であった政策については、殆ど知ることができない。そしてこうしたことは、種々の一連の出来事を同時的に——あるいは平行的に——種々の次元で客観化して追求するというよりもむしろ、出来事の年代順の経過を、それが当時の諸政策を描きだすように、再構成しようとしたこの研究論文の処理方法に照応するものであった。

しかしながら、社会民主党の議員団によって8月4日に連邦議会に対して交付された声明が、議員団内少数派との妥協をあますところなく特徴づけているのだということになるその解釈には賛成できない。確かに、8月4日のこの声明は、後の社会民主主義的・ショウヴィニスティシユな発言などと比べるなら、国家主義的な調子も少ないし、城内平和的態度を特徴づけるものも余り出ていないということは正しい。にもかかわらず、この同じ声明から論証方法によっては、当時すでに民族的な陶醉・熱狂というものがいかに強く議員団の隊列の中に蔓延していたかということも出てくるのである。戦時公債の具体的条件なしの承認であるとか祖國の戦列への旋回などというものを含む以上、そこでの

議員団多数派の勝利は決定的であった。そしてそれと比べるなら、この声明に盛込まれた「批判的言辭」などというものは、せいぜい党の内部を宥めたり鎮めたりするように作用することぐらいの役割しかもっていない。だからそうした批判的言辭というものを、議員団内での勢力分布との関連で引き合いに出すことはできない。しかもミラーによっても記録されている社会民主党の印刷物の中でのあの8月4日の投票についてのショウヴィニティシュな解釈(S. 75f.)こそは、かの女のいう妥協の結果としての決定という解釈とは、まさに正反対をなしている。この「逸脱」への党首脳による批判にもかかわらず、社会民主党の印刷物の中では大部分、これの国家主義的な解釈が承け入れられていった。

ミラーに従うなら、党内に二つの政治的党派が公然と出現することを禁じていたあの社会民主党の「特殊な規律概念」(S. 155)が、分裂を不可避にする決定的な試金石であった。だがこうしたテーゼは、多数派と少数派との間にある個有の相異をできるだけ小さく見積ることが試みられた時にのみ十分に根拠づけられるものであろう。だからスザンヌ・ミラーにとっては、1916年の全国協議会での非常に論争の余地がある種々の議論でさえも、原則的に相異している種々の立場の反映として個有に描き出されずに、概して「人格的非難」(S. 140)とかそれに類するものから説明されているのである。しかしこのような主張は長く保持されることはないだろう。

どのようにして社会民主党が現存の国家組織に対しての反対から、次第に、ドイツ国家の軍事的な敵に対しての反対へと変っていったかということについては、ミラーは十分納得いくように説明している(S. 155)。そしてまさにこの中に、社会における党の役割についての党の主流派と反対派の立場を分かつ原則的に異った理解が横たわっている。ウィーラーはインターナショナルという観点から、その違いを一層明確にさせるために大きな貢献をしていた。ミラーもこの相異を直観的に証明しているが、しかしそれにもかかわらずインターナショナルに対してはそれに相応した役割は割り当てられてはいない。そのため、もし人が党指導部と反対派との間の特徴的な相異をミラーの論文において暴き出す場合、人はその証明をまたもや戦時公債の背後にまで戻ってすることになるだろう。

さてミラーが、直接的にはかの女の研究テーマではない USPD について言うことは(SS. 156—177)、全体として見るなら、若干の大雑把な観察に限定されている。その創立大会であるとかそこへと古い社会民主主義から出て

集まってきた諸グループであるとか、またかれらが代表している政治的党派であるとかについてのかの女の叙述は、同じくかれらが代表している種々の政治的立場と同様、よく調べられ集約されている。そしてかの女が「USPD の組織的実存とその崩壊の諸要素」(S. 166) という短い分析において吟味している以下の4点は確かに考慮する価値がある。すなわちそこでは規定的な契機として、1. 社会的構造 (高度に工業化された地域に USPD の拠点があったということ)、2. 人格的影響力、すなわち国会議員達の行動への全選挙区の完全な依存 (もちろんこれは一方的な関係ではなく交互作用的関係としてあったが)、3. 特殊地方的発展、4. 党出版物の役割、大戦中の決定的な情報機関やマスメディアの役割 (S. 169)、といったものが挙げられている。

しかしかの女の USPD に対する総括的論評もそして11月革命後はじめて明らかにになってきたこの新しい党の「彼女の分析により得られた」根本的な弱さといわれるものも、ともにそこに言われているような方法によっては、その正しさが長い間保持されていくことは出来ないだろう。すなわちミラーは、この「自己破滅的な方法で」ワイマール共和国の一層の発展にとって「悲惨」な作用を及ぼしたこの党の弱さについて、以下のように書いている。

「内部的に異質の要素から出来上っていたこと、また党としての目的設定の曖昧さ、そして党の構造によって初めから与えられていた強力な指導性の欠如、そしてこの最後のものは、ハーゼの人間的な軟弱さと政治的な不決断とによって一層強められたのだが、これらである。しかし結合不可能な政治的諸要素が結合し合っていることから生じるこの USPD の誕生の時から欠陥も、もしも、強力でもっと言えば卓越した『中間派的な党派』が革命的状況の中で精力的で目的を明確にした指導性をもっていったなら、そこで修正されていたかも知れない。」(SS. 176f.)

そしてこの本の結論部では、殆ど自明であるかのように以下のことが言われている。

「この党の最大の弱点は、大戦後の現実的な政治の問題の中で党内的には分裂しておりまた党としてもつべき構想にも欠けていたということにあった。そしてこうした欠陥こそが、USPD をして、短期間のうちに、その戦場に対して現実性を喪失した無責任な急進主義者にしたものであった。」(S. 397)

こうしたことは、部分的には、人がその核をとり出し見れば、フィリップの

立場を思い起こさせるような全体的評価であるが、しかしスザンヌ・ミラーは彼以上にたくみにはこれを証明していないし、また十分論証力のある資料をそこに賦与しているわけでもない。またかの女の USPD 観は、一つの党の内部では、党が崩壊しない限り、意見の相異とか全く異った党派といったものは存在することはできないのだという、口こそ出して言われてはいない暗黙の前提の上に立っている。しかしこのことは、このこととして固有に問題とされてもよいような問題である。

ここにおいて USPD が決してたんに社会民主主義の裏側をのみ描き出しているのではないということがハッキリしてくる。なぜならこの短命な党の発展やその内的構造やその固有な力学がまさにそのように把えられていないというところに、ミラーのこうした誤った評価が生じたからである。しかしそれにもかかわらず、このミラーの本は、社会民主党の内部における反対派の成立については、沢山の散在していた資料を詳細に集めてこれを利用していうことによって、大きな貢献をなしたのであった。

8

私は、これは叙述の過程で一層明らかになることではあるが、モルガンとウイーラーの研究から私の問題設定と私の固有の方法について、最も多くのもを得た。私はこの両者の非常に利用価値のある文献解題に感謝しなければならない。それらは私に沢山の重要なヒントを与えてくれた。私はこの二人の論文によって、私の研究の端緒となるものを学んだと同時に資料の処理の仕方についてまで教えられた。

ここで、私のこのテーマについての関心と私の研究の出発点となるものについて二、三述べておかねばならない。USPD が党としてその固有の存在を閉じてからすでに半世紀以上が経過してきている。何故に、この後世になんの痕跡も残していないように見える成果の少ない労働者政党の研究に今更從事しなければならぬのだろうか。

一見したところ USPD は、ある一つの社会民主主義的な党の内部での不満やその党の政策に対するある具体的な論争における党の内部での批判から、どのようにして一つの新しい党が——そこでの構成員の様々に異った政治的経歴や遠心的な内的ダイナミックスや多くの潮流や党派の絶えざる分裂などにもか

かわらず、強固になりそして独自の社会主義的な政策を苦勞して手に入れることができるような新しい党が——生まれるのかということに対するすばらしい歴史的な実例であるように見える。しかし更に調べてみると、こうした試みはほんの短い期間しか実りがなかったということが、党員の数とか選挙での得票数とか政權への関わり方（人民委員協議会、ザクセン、チューリンゲン、ブラウンシュヴァイク）といったところから読みとられることになる。そしてこうした新党結成に際しての状況が、一つの影響力となって、長い間労働者階級にも知識人達——ここでは USPD の党員であるエルンスト・トラー、アルフレッド・デブリン、クルト・ツホルスキーなどを想起すればよいだろう——にも作用しつづけたのだった。

1920年の夏から秋にかけて、この前途有望と思われていた運動は、わずか数ヶ月のうちに崩壊してしまった。そしてその後に残ったものは最早古い党ではなかった。この外観上は突然で急激な後退の原因は何だったのか。そしてまた人はこうした問題に関わることによってそこから何かを学ぶことができるのだろうか。そしてもしあるとしたら、それは何だろうか。

こうした問題が私の関心を引きまわし、そして私の研究方向を規定しているのである。私はハレでの分裂大会と二つの統一大会——1920年12月の USPD（左派）と KPD との、そして1922年9月の SPD との——の資料を基にして、こうした展開の諸条件について問うていこう。その展開は不可避であったのか。そしてもしそうであったとするなら、何故そうなのか。党の内的構造によるのか、党員の構成によるのか、あるいは党をとりまく政治・経済の領域での全体的展開によるのか。どこでその方向が曲げられてしまったのか。それではこの USPD にとっては不運であった展開が、人がそれを正しく評価することができるかぎり、どのような関心にとって役立つのだろうか。

このように問題が立てられたため、そこにおいて種々の決定が生み出された状況というものが、それ故その決定的な党大会や全国協議会、そして更にはコミンテルンの第2回大会といったものが、今までより一層綿密に分析の焦点にもってこられねばならなかった。だが他方において党大会やその前後の当時の労働者出版物の中で行なわれていたような論争だけでは、この抗争が尖鋭になっていく過程を理解するには不十分である。党大会の議事録は、その時その時の議論の状態であるとか認識の状態といったものをそれぞれの正確なデータの上で見せてくれる。しかし、USPD の内的発展がそこにおいても静止していない党大会と党大会との間の時間的空隙については、さらに巾の広いデータ

や資料によってそれをうめていかねばならない。すなわちその党の発展がその前史及びその成立時から知られるようになってはじめて、そこでの議論の前提とか大きく相異していく政治的見解というものが、その核心においてハッキリと捉えられることができる。意見や立場というものは、それらがいくつもの党大会において継続して衝突しつづけたように、それらに個有な発展の歴史をもっているのである。

ここにおいては、何か新しい **USPD** の歴史が書かれるというのではない。そのためには、既に述べたように更に膨大な予備的作業、主として地域的・地方的研究におけるそれが必要であろう。しかしここではそれはなされていないため、諸々の政治的出来事の社会・経済的な条件とかそれらの国内政治や外交政策に対する関係というものは、いくら努力しても引き出すことができないだろう。またここでは **USPD** の内部におけるイデオロギー的な諸論争に対する精神史的な総括というものも意図されていない。またここでは革命後の修正主義に対する新しい解釈とかボルシェヴィズムとか次第に強固になってくる自由主義的・保守的世界とか古い封建主義的な反動であるとか、更に、新しい反革命的大衆運動であるファシズムであるとかといった外的世界に対する **USPD** の種々の党派のイデオロギー的対応についての精神史的な総括も、意図されていない。**USPD** の分裂と崩壊とに関わる今上に挙げたような諸問題は、まさにより大きな歴史的・社会的枠組の中においてのみ着手されることになるだろう。

今後の更なる専門的研究に対するプロローグとも言えるこの私の著書において試みられているのは、**USPD** がその揺籃期からその組織的な死に至るまでに歩いた道の中で最も重要なところに対して、いわばスナップ写真を撮るようなことである。そしてそのような重要なところとしては、今までの殆どの研究の中で継ぎ扱いにされ、ウーラーやモルガンもその二、三のものについてしか詳細に明らかにしていないところの党の決定機関である中央での諸会議が考えられるだろう。事実ウーラーもモルガンも1919年夏の社会主義者会議*については何も報告していないし、1923年4月の「**USPD**」**の党大会などというものについては人は何も知っていない。時にはそうした会議に先行したり、また会議そのものの上で口火が切られたり、またそうした会議の結果において生じたりしたような諸議論の中に、この党の生成も、1919年から20年にか

* (訳注) SPD による **USPD** との失敗に終わった統一への働きかけの一つで、一応 SPD とは異なる統一のための準備委員会をベルリンに設け、そこから1919年6月21日にこの会議を開こうという要請がなされた。

** (訳注) レーデーブアーリープクネヒトグループによる **USPD** 大会。

けての大躍進も、1920年の夏から秋にかけての分裂も、そして最終的にはその後のほんのわずかの年月の間に来た崩壊も、あざやかに映しだされている。

それ以外にもこの党の発展を更に他の次元において追求していくことは不可避的のように見える。党の指導部については何が言われうるだろうか。もし党の中央組織にあるすべての職務を個々に担っていた人々についてその経歴などを伝記風に調べるならば、それは、それが社会学的な範疇でとらえられる限り、人事の面での党の変化を明らかにしてくれるのに役立つだろう。1924年までの国会議員選挙や地方選挙の結果を隙間なく整頓することは、すべての選挙区におけるこの党の地域的な強さとか発展についての説明を与えてくれるだろう。また他の労働者党の選挙での強さと比較することからは、この共和国の運命にとって決定的であった何年間における政治的ダイナミックスが解明されるだろう。第一次大戦後のドイツの社会的・経済的発展についての記録は、たとえそれが欠損部分が多く粗雑なものであるかもしれないけれども、党の歴史の社会的背景を解き明かすためには寄与することができるはずである。

9

USPD の包括的な歴史を書く際には、しかし今まで一つの重要な前提が欠けていると言わねばならない。すなわち、第一次世界大戦に続いて起こった種々の根本的な社会変動に対していまだに総括的な叙述がなされていないということである。しかしそのような研究は決して片手間に出来るものではない。そのため私も、さし当って、ここにそのささやかな成果を提示しようとしているこの研究についても、一定の留保条件をあらかじめ提示しようと思う。この書物の中で十分な考慮が払われていないものは何か、そしてまたそれは何故なのかということについて、あらかじめここで言っておかねばならない。

まず第一に「階級の敵」についての問題である。11月革命以前のそしてまたそれ以後のブルジョアジーの側の状態は、どのように把握され、分析され、解明されることができるであろうか。USPD は、たんに多数派社会民主主義者の政策に対して反対していたばかりではなく、勿論、一層強力にすべてのブルジョア政党の政策に対しても反対していた。このことは、かれらが権力形成とか権力参加に関してとった種々の態度によっても明らかに例証できる。そしてま

た USPD が「反動的大衆」なるラサールの定理* を擁護していたなどということも全くない。だからもしも、大戦中あるいは大戦後の社会的変動とかまたはそうした変動が「ユンカー国家」に根ざした諸党派に与えた影響とかについて、その原則的な分析が問題となっていなかったとしても、民主的な諸政党と明らかに反動的な諸政党との間にある相異が、ブルジョア側の内部において観察され分類されて記録されて然るべきであった。だが、USPD がブルジョア諸政党をかれらの掲げている民主的要求に応じて比較検討し、かれらが常に繰り返し多数派社会民主党に対して試みていたような、いわば言質をとるというようなことをブルジョア政党に対して始めたのは、反動的な勢力が——1922年のラーテナウの暗殺以後はとりわけそうであるが——民主主義的・議会主義的共和制の存続を直接に危険にさらすようになり、また USPD 自身が多数派社会民主党への再統合の道を選んだ時になって初めてだったのである。その時になって初めてブルジョア側の個々の政党が種々異なるものとして重さをはかられ価値づけられたのであった。しかし1922年1月にはもう、ライプチヒの USPD の党大会の決議がブルジョア諸政党との「いかなる連立」をも無条件に禁止してしまったのである。

USPD に対して全体的な叙述をしようとするならば、そこではブルジョア諸政党に対する USPD の変化していく関係が、その研究の範囲内に組み込まれ、正確に写しとられねばならないのは当然である。しかし党の存在をめぐっての闘争がつづいた決定的な何年かの間は——1920年のハレでの党大会までは——ヴィルヘルム退位後の社会の政治的諸勢力に対する関係という問題が、問題として比較的小さな役割しか果たしてはいなかった。まさにそういう理由で、この本においてもこの問題は、たんに末梢的にしか扱われないことになる。

それに対してこの当該期間に平行して他の労働者政党において生じた種々の発展過程に対する問題は、比較にならない程重要に見える。その際、共産主義労働者協会 (KAG) とかドイツ共産主義労働者党 (KAPD) とかその他の小さな諸党派といったものも重要ではあるが、やはり多数派社会民主党とか共産党といったところが重きを置かれることになる。しかしながら、ここでは、そうした労働者政党の成長とかあるいはその逆の停滞とかといったものの諸条件や、

* (訳注) このラサールの定理については、マルクスの『ゴータ綱領批判』参照。そこでは「労働者階級に対しては、ほかのすべての階級は、一つの反動的大衆をなすにすぎない」というゴータ綱領からの引用が、まさに「ラサールからのまじりけのない引用」として、マルクスにより批判されている。

またかれらの陣営においてなされていた諸々の議論や、更には当時の社会的・経済的諸問題に対してかれらが与えていた解答といったものについては、大部分、独立した扱いはしていない。そして、こうした諸政党が USPD の発展に対して直接的な関係をもった限りにおいて、その割合に応じて、かれらを取扱うことになるだろう。もっともこうした方法をとるについてはそれなりの理由が必要になってくる。

最近の50年程の間に、USPD については沈黙が維持されているのに対して、今上に述べてきたようなことについては、その殆どについて、たとえその問題関心の生じる場所は異っており、その評価も研究方法も異っているとしても、種々の特殊研究の対象とされてきた。USPD が依然として日蔭におかれているのは——一番最近に出された諸研究については既に述べてきたところではあるが—— USPD 自身が、再統一した SPD にもまた KPD にもその後残っていないような何か独特な内部構造をもっていたということによっている。その行きついた結果から見てみるならば USPD はその崩壊の後も一層、共産主義者にとっては「頼りにならない中間派」の党として、また社会民主主義者にとっては「うさんくさい半共産主義者」の貯水槽として、一つの挑発的で警戒を要する事例であった。だから社会民主党も共産党もこの部分 (USPD) を、たとえおおよそのところではあってもかれらの固有な歴史と同一視させることは不可能であった。そこでその研究の関心はなにはともあれ労働運動でのその「実り豊かな」伝統的な輪郭へと向けられてしまっていた。そして USPD は過度に看過されているのである。こういうところから、緊急に「遅れをとり戻そうという要求」が生じている。このように等閑視されているものの遅れをとり戻すということは、この今まで継子扱いにされてきた党に対して強力に自己を集中させてはじめて可能になることである。しかし一般的に言って、ある一つのものに集中すれば、どうしても必然的に他のものはおろそかになってしまうものである。USPD について言うなら、その「内部の仕上げ」がある一定段階にまで到達して初めて、この党と他の労働者組織との絡み合いとか関係とか依存度とかに対して効果的な研究がなされるであろう。

さて、ブルジョアジーの陣営に対する態度と他の労働者政党やそれに類する組織に対する関係という二つの領域とならんで、第三の領域についても同様にここでは研究の対象から取り除かれている。すなわちその政治的な特殊構造の結果として生じてくる USPD の地方的な情勢下での役割について、以下の叙述の中では殆ど注意が払われていない。勿論、1920年6月の選挙について述

べている節（本文、第3章・5節）においては、地方的な情況とか USPD の地方的な強さとか弱さとかについて若干のことは述べられている。しかしそれはあくまでも付論といったものを出るものではなく、これに関連する諸問題は決して十分に分析されたり追求されたりはしていない。

こうしたことが生じたのは、無論、資料収集の面での客観的な困難さにもある。というのは、DDR（東独）政府が、何の理由も挙げずに私がそのアルヒーフに入ることを拒否したため、ザクセンやチューリンゲンや工業化されているハレーメルセグルクの USPD の組織について、これを効果的に解明することができなかったからである。（これに反してウイーラーやモルガンは、そして短期間ではあったが垂水節子は、種々のかれらが希望した DDR のアルヒーフの中で選び抜かれた記録を使って仕事をするのを許されたのである。）しかしこれは当然のことであるが、私はこの同じ理由を、ザクセン等と同様に重要なライン-ヴェストファーレンの工業地帯に対して、更にまた USPD がそこにおいて重要な地方的拠点をもっていたヴェルテンブルクやベルリンやミュンヘンに対して、挙げることはできない。これらの地域に対しては、絶対的に私の下調べが不足しているということが理由である。

この党がドイツ国家の種々なる部分で非常に乖離した構造をもっていたにもかかわらずあるいはまさにそのために、まず第一にその全体的な発展を目的の粗い網で素描し、そしてそれを資料的に豊富にするということが、最も緊急の課題だと言える。そしてそれが終わった後に、更なる細部にわたっての研究や地方的な研究の中で、その網の中で次第に明らかになってきた白紙の部分が事実や資料をもとにしてうめられるべきであろう。まず最初に網が投げられなければならない。そしてもし USPD についての地方的な研究を出発点として置くならば、それにはある種の個別研究のもつしかつめらしい機能がふさわしいであろう。たとえその枠組がどのように狭いものであろうとも、一定の全体的な叙述がなされて初めて、地域的な研究成果の中で確認されたり（あるいはまた制限を受けたり）するような党全体に対して妥当することが、言いうるのであろう。

10

USPD の発展は、その外部的発展も内部的発展もともに決して真空状態の中で進行したわけではない。だからこの USPD の発展の中には、連邦国家の領域での全政治的・社会的筋書きもまたドイツ諸邦におけるそれも、ともに反映

されている。しかし USPD がそうした一連の出来事に対してどのように反応したかということについて、それを一步一步追求めるような研究は今まで提示されていない。そして先にも述べたように、革命の最初の時期に対してだけでも、こうした要請に応えるような研究は殆どない。しかし革命の出来事そのものについてやまたヴァイマル共和国の第一年目について回顧するならば、この時期に全社会的な発展にとっても更にまた個々の諸邦の発展にとっても、いかに根本的な決定がなされたかということを知るだろう。USPD はこうした決定に対してどのような立場をとっていたのだろうか。また USPD はこうした決定によって、その外延的な成長とかその内部的論争にどのような影響を受けたのだろうか。

国家に敵対していた社会民主主義的な労働者政党が、急進的な労働者達に対立して、古くからある将校団とかカイザーによって採用されていた官僚達のある部分と結んで、決して完全にはブルジョア化もされていないような既成の社会秩序を議会制民主主義の体制で支えていくことをただちに同意するような、そしてまたその際、それを明確に放棄したというのではないにしても自分達の究極目標を自分達の政治的存在の後景へと一層しまい込んでしまうような、そうした政権担当政党になってしまったという事実は、労働者階級の意識の上に、そしてまたブルジョアジー及びその種々なる構成要素の全体的な態度に、如何なる影響を及ぼしたのであろうか。たとえそれ以前は、労働者階級にとって社会民主党というのは、労働者によって拒絶されているあるいは労働者を拒絶している国家に対し、これに反対しているということによって労働者の党として現われていたとしても、今や、この党は労働者に対し国家を支える党として、その上部分的には疎遠な党として立ち向ってきた。

多数派社会民主党でさえ1919年の初めにはまだそれを要求していたあの社会化の遂行ということも着手されなかった。そしてその代償として、同じ1919年の初めに、地方的・地域的な革命政府（レーテ共和国とか労働者の臨時政府といったものを指す）は、—— どのような理由からであろうと—— 崩壊しあるいは（もちろん旧）軍隊の手によって暴力的に打ち壊されてしまった。社会主義的な政府（たとえこれに多数派社会民主主義者達が協力していたとしても）を軍事力によって中断させてしまったあのメルカー軍団* は、多くの人々の目

*（訳注）1919年の革命的動揺期において、ベルリン、バイエルン、ハレ等の革命運動を次々と弾圧していったあの義勇軍のいわばモデルともいべきもの（当初は獵兵義勇軍と呼ばれた）を作ったメルカー将軍の率いる軍団。

には、社会民主党に導かれている連邦政府のそしてまたそこでの軍務大臣ノスケの直接的に延長さそた腕として現われたのだった。しかしまたこの政権担当政党としての社会民主党は、1919年から1920年にかけて労働者の日常生活を支配していた深刻な経済的情况、すなわち、戦争賠償、復員兵士の再編入、インフレーションの始まり、領土喪失、困難な復興、諸外国との以前のような紛争を起さずに達成されねばならない自由経済への移行といった深刻な経済的情况を和らげるという幸運には恵まれなかった。そして労働者大衆の利害に一致する唯一の政党という社会民主党の古いイメージは、たとえば大戦中及びヴァイマル共和国の初めにおいてそれときそい合う諸労働者政党が誕生したということは別にするとしても、本質的な変更を余儀なくされた。こうした一連の問題が USPD 及びその急進性の発展に対してどのような結果をもたらしたのであろうか。

種々の諸邦ではどうであったのかということについて一瞥してみよう。連邦国家のレベルでは多数派社会民主党と民主的ブルジョア政党の連立政権が支配していたが、地域によっては、部分的に行政権力が社会主義的連立の手中にあるところがあった。すなわち、ザクセンやチューリンゲンでは多数派社会民主党と USPD が、あるいはまたブラウンシュヴァイクやゴータでは USPD の単独政権が、あるいはまた——これは1918年11月から1919年の初めまでではあるが——バーデンやバイエルン、メックレンブルク-シュヴェリン、オルデンブルク、ヴュルテンブルク等において、そしてまたこれは1918年の年末までではあったがプロイセンにおいても、USPD の参加のもとに種々の臨時政府が、行政権力を掌握していた。すなわち USPD の党員やシンパ層のもとでの労働者大衆の意識の形成過程にとっては、上に一瞥したような結果が現われていた。それでは、たしかに議会主義的な機構への参加を利用しつつすということであっても、現実のこうした政権参加というところからは、国家とかその変革の可能性とか政治的行動の必然性といったものについて、どのようなイメージが生じたのであろうか。

こうした政策は、事実またまさに大衆の急進化と行動的なインターナショナル（もしかすると第三インター）への加盟のお蔭で世界革命が前進するという希望とを考慮するなら、どのような帰結へと導いたのだろうか。更にまた人は、多数派社会民主党との地域的な連合やあるいは USPD が単独でそれを牛耳っていた傀儡政府やでは、小さいやまさに最も小さな邦においても、決定的な変化というものを克ちとることが不可能だったということが、USPD の党員を

して「実り多き」ロシアの例の無批判な継承へと向かわせたのだと言うことができるのだろうか。たしかに政權に参加していくという方法では、急速で徹底的な変化を達成することなど殆ど展望がなかったということが、イデオロギー的な諸結果を招いたということは、疑う余地のないところであろう。しかしこうした諸結果は、どのようにしたら正確にとらえられ、そしてその有効射程範囲の中に規定されうるだろうか。地域的・地方的な権力秩序に参加していくことが、最終結果としては成果がないままに終わったということは、どこにその原因があるのだろうか。こうした失敗の原因は、その時その時の個々の状況がもっていた特殊条件の中に探し求められるべきものなのだろうか。小さな地域的に孤立した場所で国とは異なる急進的な政策を遂行するということは、——そうした個々の地方的な構造を多くの他の地方と結びつけ更にその地方の全体的構造とも結びつけていたその多様な編成・組み合わせといったことのゆえに——不可能だったのだろうか。それとも小さな範囲内で決定的な変化を求めて努力すること自体が、資本制的な固有な秩序を根底から暴力的にひっくり返し、その上に存在している「ブルジョアジーの権力」を最終的に否定しない限り、全く展望がないものなのだろうか。

ある時は強力にまたある時は弱く、こうしたことへの熟考が1919年という年を通して試みられた。しかしそこでのイデオロギー的相異が互いに全く反対方向へと向かっていき最早それを克服できないような対立が生じてくるに従い、軍隊が革命的な臨時の権力構造に対立して、益々野蛮にその端緒から介入してくるようになった。こうしたことについては、USPDの機関紙における数多くの発言とか今でも残っている多くの人々の個人的なメモやそれ以外の記録から、その上、多数派社会民主党の側での討議や論争からさえ、知ることができる。USPDの内的発展の中でこの対立の重さをしかるべく評価するということは重要なことである。今までのUSPDの研究は、特別にこの問題に関わるということをや殆どしていない。党大会での討議を分析することは、少なくとも、この対立の間接的な反響を捉えることを可能にしてくれるだろう。

いくらか違った観点から見ると、このイデオロギー的対立は、1919年の終りから1920年の初めに、すなわち、制度の構造的変革とかレーテモデルの牽引力を工場労働者の企業代表を制度化することにより集約していくこうとする連立

政府の試みが、経営レーテ法* とその適用をめぐるの苦しい闘いを解きほだしたその時期に、その頂点に達した。その際そこで行なわれていたのは、たんに「名譽ある」レーテ体制というモデルに足かせをつけてその力をそぐことをねらっているのだということを暴きだせばそれでよいような新しい欺瞞的なマネーゲームであったのか、あるいはそれとも、合法的に根拠づけられた経営レーテが実際に階級闘争における付属的な傀儡として利用されえたのだろうか。また経営レーテの力をかりたなら、古い労働組合の硬直化した器官を「踊らせ」たり、右派社会主義的な城内平和論者の代りに労働組合指導部の中に反対派のUSPDの労働者を送りこむことが可能だったのだろうか。

労働組合というものに対して、そのかつての闘争的性格を再び賦与しようと努力することは、当時まだ意味があったのだろうか。それとも労働組合というものは、モスクワからいつも聞かされていたように、資本主義に奉仕する「黄色い」連合になってしまっており、その結果錆びた鉄のようにさせられていたのだろうか。一步一步着実に何かを征服していくべきだったのか、それとも労働運動の領域においてもいちかばちかやってみるべきだったのか。しかしこの労働運動の場でも、他の領域と同様、ますます一層対立的な立場があからさまになってきていた。そしてこうしたことについても人は、党機関紙とか労働組合の発行物とか KPD やコミンテルンの機関誌といったものから、それを知るであろう。しかし今日までこれについての特殊研究はなされていない。USPDの歴史について最近出された研究の中でも、党の労働組合組織への関係という問題は、分析の中心には置かれていない。これが特殊個別研究の対象となっていない限り、党大会での議論——例えばハレでの分裂の前夜に闘わされた深刻な論争——の中でのその反響に対して、一層大きな意味が加わってくるのである。

労働組合に対する立場や新しい企業レーテに対する態度をめぐるの論争は、カップの下での軍隊や義勇兵による一揆が政治状況を著るしく混乱に陥し入れた時でさえ、盛んに行なわれていた。そしてこのカップの一揆に対しては、労働者階級の組織的抵抗がゼネストという効果的な形で現われ、大衆の革命的決意の再度の燃焼を示した。にもかかわらず、この一揆の試みを挫折させたということは、当時の分裂していた社会主義者の戦列の統一に対しても、更には

* (訳注) これは1920年1月18日に可決された。「経営レーテ制度は、戦時下の階級協調・苦情処理機関・労働者委員会の次元への政治レーテの矮小化にすぎなかった。」(中村丈夫編『第三インターとヨーロッパ革命』p. 139)

労働組合によって提案された社会主義的な政府の創造*ということに対しても、何ら益することはなかった。特に共産党は頑迷であった。すなわち共産党は、これは後には公然と是認されたことではあるが、USPDを多数派社会民主党との連合へと追いつめ、そうすることによってUSPDの正体を暴露することを望んでいた。しかし他方では、政治的権力を革命的組織の手に入れようとする地方でのいくつかの試みが、そこへ派遣された征伐軍団の手により多数の人々の血が流されるなかで息の根がとめられていった。しかもその際、多数派社会民主党の大臣達は、将軍達の古くからあった独裁権を抑えることはなかったのである。こうして労働者階級の行動の統一ということは、それが実を結ぶことができる前に瓦壊してしまった。何かなされるべきだったのだろうか。その一年程の間に党员や支持者を非常に増大させていたUSPDは、どのようにその舵をまわしていくことができたのだろうか。またインターナショナルな規模では、あのロシアの見本に従った、そして恐らくはロシアの指導の下での冒険主義的な革命行動以外に他の方策はなかったのだろうか。

1919年の初めに創設された共産主義インターナショナルへの加盟をめぐるの公然たる闘いは、USPDの左右両翼が国会議員の選挙の準備に熱中して関わっていた限りでは、両陣営においてブレーキがかけられていた。しかし1920年の6月の選挙が、たんにUSPDの大勝利をもたらしたばかりでなく、多数派社会民主党の重大な後退をもたらし、そして最早議会内多数派を組閣することが不可能になったヴァイマル連合の終結をも結果した時、共和制的 - 社会民主主義的「革命」の時代はハッキリと終了したのだった。逆説的かも知れないけれども、USPDの選挙における勝利をもって、組織的な労働運動は、たとえ最終的にはその持ち分がどんなにわずかなものであったかも知れないとしても、その連邦国家の中での牽引力の中にもっている最後の持ち分を喪ったのである。そして今や、重工業などの共和制に敵対するサークルの包囲のもとで純粋にブルジョア的な連合が単独で支配することができるようになった。こうしたことははたして、民主的で議会主義的な道においては何ものも獲得されえないとか、また他の闘争手段がとられねばならないとか、更に、ただロシアの例に追従することが成功を約束するのだというようなことを漠然とかも知れないけれども

* (訳注) これは自由労働組合のレギーンにより提唱されたものでヴァイマル連合政府の代りに労働者政府 (USPD, SPD, キリスト教労働組合までも含めた) を創ることを要求した。しかしこれはUSPD左派 (ドイミッヒ) らの反対で挫折した。ローゼンベルクは、このレギーン の提案の中に、ドイツ革命の新しい可能性をさえ見ている。(A. ローゼンベルク、『ワイマル共和国史』pp. 119~121. 参照)

証明しているのでしょうか。そしてまた、ドイツの共産主義者にとっては、それまでとられてきたのとは違ったそれにふさわしい態度がとれなかったのでしょうか。

1920年の夏までは、USPDにとって、1918年の暮れにスパルタクスブントから生まれてきた共産党というものは、その無力さと無意味さのために、殆ど眼中にも置かれていないし注目もされていない存在だということが、自明のことであった。実際 KPD は、党自身が禁止され、その指導者達が暗殺され、新聞も発行禁止になり、党の重要な部分を占めていたものが独自に KAPD として固有のサンディカリストの連合に組して分裂していくなどで、国内政治の舞台ではほとんど何の役割も果していなかった。しかしながら、1920年の夏には党をずたずたに引き裂き同年10月のハレでの分裂をもって終熄したあの第三インターへの加盟をめぐる USPD の党内闘争がこうした情勢を大きく変えてしまった。KPD は思いもかけず一つの重要な政治的要素となり、USPD (左派) の加盟によって一つの大衆組織となった。これに対して USPD が、その後も独自に存続しつづけることに対するイデオロギー的また物質的な諸前提は何だったのだろうか。どうしたら USPD は KPD と SPD との間で独自性を発揮することができたのだろうか。どのような立場をかれらはとることができたのであろうか。どのように——具体的に——彼らは連邦議会や諸邦の州議会での彼らの固有の役割を見ていたのであろうか、また、議会外での政治的・経済的活動での役割についてはどう見ていたのであろうか。1921年から22年にかけて急速に進行してきたインフレーションによる生産の復興ということが、この党の物質的・イデオロギー的再編成という問題に対してどのような結果をもたらしたのであろうか。ブルジョア的・保守的諸党の強化、王制復古を目論む反動的グループの軍事的組織の結集、民主的政治家達の暗殺、こういったことすべてが、たしかに USPD の発展とは対照をなすような背景ではあったが、しかし今までのところ、USPD に関する研究の中でいかなるものも、上に概括したような政治的事件の影響を描写したりそれらの結果を分析しようとしたものはなかった。

USPD の歴史について、その活動とかイデオロギー的かつ構造的変化を重要な地域の発展の軌跡を考慮しつつ書くということは、それ故政治的要因も経済的要因も含めて全社会的な枠組の中でそれらを叙述しようとするのは、簡単にできるものではない。そのためには、単に必要な予備的作業やなかならず若干の原資新が欠けているばかりではなく、そもそもそうした課題が一人の人間

によって克服されうるなどということ自体がまず考えられないことなのである。だから、そのためには歴史学者や政治学者や社会学者や経済学者からなるグループ研究が必要になってくる。そしてそこで個々の研究者に対しては、それぞれの専門分野を、そこに必要とされている徹底さと詳細さをもって追求し、しかる後それらの多層的な資料の一つのものの中へと溶け合せ、その資料がもつ種々の観点を提供するという課題が課せられるのである。ここに提供する私の研究は、そうした分不相応な目標を追求するものではない。

この私の仕事は、上のような全体的な叙述に対して若干の必要な部分を提供するだろう。その際この私の仕事は、USPDの委員会や党大会の論争の中で、それが明らかになってくる限りでのUSPDの党内的な発展というところに叙述を限定している。そしてこの仕事は、こうした論争の、時としては全く混乱しているような外見をできるだけ判るように把握し（勿論その細部にまで十分というわけではないが）、そして同時に、そうした議論の中で——まさに特徴的に——何がそこに反映されていないかを暗示してみようとするものである。

11

この研究の主要な前提の一つは、叙述が進むにつれて種々の章において顕著に示されていることではあるが、USPDの全政策がそのかなりの部分を、所与のものであれ変化しつつあるものであれ、そこでの政治的諸関係への単なる「反作用」として把握されうるということを示している。これは、たんにこの党の短命さにはかりよるのではなく、この党が異質なものによって構成されたということやそこにおける様々に有為転変する政治的諸党派にもよるのであるが、しかしなんといっても、USPDがSPDの多数派の政策を拒否するというネガティブなもの以上には何ら積極的な独自の目的設定を自己の基礎に置かずして党として独立してきたというその成立の仕方に、原因がある。そしてUSPDにとっては、自分からは意識的な政治的プロセスを作り出さずに、むしろ無力な抗議をもって現実に目の前にある政治的諸決定に対し関わりつづけるということが、後になっても特徴的に残った。このことは、党の中央大会やその全国協議会やそこで行なわれた議論において、明確に露呈されている。

1917年4月のUSPDの創立党大会において政策的なものの中で詳論されたものは必ずしも多くない。そこでは原則的には、党設立に対する意義づけと

戦争政策の拒否、そして伝統への忠誠ということが問題となっただけではなかったが、しかし社会的状況の分析とか革命的目的についての徹底的な吟味といったことはなされていない。1919年3月、古い体制が消滅した後になっても、新しい社会の内容と構造については熟考されることもなく、一つの政治的変革過程の抽象的表現としてのレーテ思想であるとか既にそこに存在していたレーテ組織であるとかに対して一つの明確な立場をとることが、なによりもまず第一に努力されていた。そしてその際、一般的に言うなら、力関係の具体的な諸変化とかあるいはある社会的な変革にとっての具体的な諸前提といったものは、決してあるいは殆ど分析されてはいなかった。たとえ既存の階級構造をアクティブに変革していく担い手としてのレーテというものが問題になったとしても、その議論に参加した人々の関心は、労働運動の新しい組織的形態としてまたは革命的な国家強力の権力構造としてレーテ体制を展望するというところではなく、たとえ新しい（今なお資本主義的な）国家構造の議会主義的な憲法の中にレーテ原理を固定化させるなどというのではないにしても、その制度上の瞬間的な問題に向けられていたのである。

1919年12月と1920年10月* とにおいては、事態は何ら変わってはいなかった。行動的で実践的で社会主義革命を組織するインターナショナル——第三インターであれ、これから創立されるべき他のそれであれ——への加盟の問題は、はっきりとしかも明確に議事日程に登っていた。そしてその際、革命的目的を直接的に（インターに加盟することによってではなく）実現するという問題が提起されるということがあってもよかつたはずであったが、そこにはなかった。そしてドイツ革命の挫折の経験とかそこから引き出されるべきであったところのものに対しては議論もなされず、また革命後のドイツ社会の社会的な構造的特徴であるとか変化した社会的構造から生じてきても然るべきであった大衆運動についての展望ということも分析されず、更にまた革命的な再組織であるとか階級意識や新しい社会組織への大衆の教育であるとかということを考えて党の課題が語られたこともなかった。そして（まだ克服されていない）階級の敵に対し、これを抑制するのに暴力を行使することが有利であるか不利であるかということが、なにもない抽象的レベルにおいておしゃべりされ、またボルシェヴィキ達はどちらの政策を正当あるいは不当であると評価したであろうかなどということについて、同様に抽象的レベルで話し合われていた。

*（訳注）「1920年10月」はハレにおける USPD の分裂大会、そして「1919年12月」というのはライプチヒの党大会。そして経営レーテ法はその翌年1月に可決された。

しかしここにおいては、ボルシェヴィキ達がしていることやしてきたことについては、勿論まるで知られていなかったし、いわんや革命前のロシアや革命期のロシアの社会的経済的情况については一層知られていなかった。ドイツにおける革命的勢力の一連の敗北の前では、社会主義革命がロシアにおいては勝利し、しかも反革命に対抗するだけの権力が確立されているということを知るだけでも、感情的には十分であった。たとえば、USPDの中央機関紙である*Freiheit*にのったロシアの模範についての、すなわち権力の獲得・維持・行使としてのソヴィエト・モデルについての数少ない記録や記事を見る時、人は、そこに提供されている情報がいかに不十分であり、またそれ(ソヴィエト・モデル)についていかにわずかしか論究されていないかということに気づき、奇異に感じるであろう。第三インターについての議論がUSPDの党機関紙により取り上げられるようになった1920年の夏になって初めて、そうした問題が前面に出されることは多くなったが、しかし報道される素材はそれと比例して付け加えられるということとはなかった。

いかなるUSPDの党大会においても、またいかなるUSPDの協議会においても(そしてまた共産主義インターナショナルの第2回世界大会へのUSPDの派遣団の掃還に際しても)、ソヴィエト国家の生成と発展についての専門的知識からする報告はなかった。こうしたいかなる会議においても、ロシア革命の問題性とか、ソヴィエト国家の階級の中身とか、資本主義体制の崩壊の形態であるとか、経済的再建と社会的再組織といったことについて内容のある論争はなされなかった。今までに現わされている諸文献においても上のことは殆ど注目されていない。党大会における論争を分析してみればはじめて、共産主義インターナショナルへの加盟をめぐる闘いに熱中していた際にも、ソヴィエト体制の本質がいかなるものであるかということが、そのどの時点をとっても議論の対象とはなっていないということが、明らかになるのである。

大会の議事録からは同様に、プロレタリアート独裁という問題が、確かに種々形式的には問題になっていたとはしても、その独裁概念については理論的にもまた歴史的発展の特定の局面へのその適用ということについても、詳しく議論はされていないということが、明らかになってくる。そしてその源となるべきマルクスやエンゲルスの著作も更にカウツキーのそれも、1919年から20年にかけては全くマルクス主義的な概念のアクチュアルな意味をもっていなかったし、またレーニンが『国家と革命』や『プロレタリア革命と背教者カウツキー』の中で定式化した説にしても、USPDのインターナショナルへの方向づけ

をめぐる論争が行なわれていたまさにその期間に、共産主義的な党の出版事業を通してドイツ語に翻訳されて広められた書物の中には入っていなかったのである。

一般的に独裁ということが語られる場合には、その議論は終局的には革命的国家強力によって適用されるべき統治手段に対して、すなわちなによりもまず第一に恐怖政治というものが革命的秩序を保証し社会的変革を実現するために社会主義的観点から見て合法的な手段であるかどうかという問へと向けられるものである。しかしこの議論は——これについては更に十分に問題にされることになるが——、ただ議論の片隅においてなされただけだった。1919年の全国協議会において、だしぬけにこのテーマがガイヤーによって脚光を浴び、また1919年のライプチヒの党大会においてレーデブーアもこの問題をとり上げた。しかしこれが政治的意味を獲得したのは、インターをめぐる争いとその最終局面を迎えた時、すなわち直接的には分裂の前夜において初めてであった。そして政治的に平行線を辿っている意見が道義的にも結合不可能なものとして現われた時点で、もはや妥協的な解決などは不可能だということが公然と明らかになったまさに論争のその段階において、この今まで殆ど注目されていなかったところのものが社会主義者としての志をはかる物指しとなったのである。

党内における抗争がその頂点に達した時になってはじめて、種々の異った概念へと向かう党内部の諸党派あるいは主義を維持していくという主張をもった断固とした立場は、原則的に受け容れられないものだということが明らかになってきた。そして共産主義インターナショナルが（レーニンの権威ある列席のもとで）その「21ヶ条」の中で、インターナショナルに迎えられる諸党においては、一つの概念に対する忠誠とかれらの「中間派」の指導者を追放することを要求した時、社会主義的党の役割について共産主義インターナショナルがもっているイメージというものが最早疑う余地のないものになってきた。

たしかにローザ・ルクセンブルクはすでに1904年に、レーニンの組織に関する考え方に対しマルクス主義的な定期刊行物である *Neue Zeit* において徹底的に否定的な批判を投げかけ*、それ以来一連のロシアやポーランドの社会主義者達の中でそれに対して決然と闘ったが、しかし1904年のあの激しい論争は既に忘れ去られ、東ヨーロッパの兄弟党における諸経過はドイツの社会民主党

*（訳注）ローザ・ルクセンブルク「ロシア社会民主党の組織問題」（ローザ・ルクセンブルク選集（現代思潮社）vol. 1.）参照。

の中では殆ど知らされておらず、大戦後は一層全くなにも知らないと同様であった。USPD 内の最もアクティブな左派にとってさえ、ロシアにおいて不可侵のものであった『党の役割についての理論』は、七つの封印の押された本であった*。いかなる USPD の中央の大会においてもこの組織問題は報告されるどころか代弁されることもなかった。そして第三インターのハレへの派遣団もそれについて報告しないように気をつけていた。そしてその後には、既に「21ヶ条」の中で構想されていた徹底的で妥協を許さない「ボルシェヴィキ化」がやってきたのである。

ロシア革命やボルシェヴィズムやレーニンの理論に関して、党大会での論争の中に明らかな空白部分があるということは、USPD の分裂と VKPD の創立（しかしこれはボルシェヴィキ化していくのだが）へと進行していくその展開を理解するのに少なからず役立っている。しかしまたドイツの状況に対してはっきりと空いている大会議事録での空白部分も、それに劣らず大きな意味もっている。USPD の党大会がいかにわずかしか、戦時中及び戦後の社会的変化に対して関わっていなかったかということについては、既に述べてきた。革命の必然性や革命の高揚期が去った後に党がとるべき道などをめぐって確執があったにもかかわらず、そこにはそれを行なうに必要な伝統的なマルクス主義的な出発点が欠けていたのである。すなわち USPD のいかなる中央の会議においても、ドイツの経済的發展についての分析（大戦と戦後とがもたらした深刻な変化についての）は勿論、大戦と革命とによって根底から変えられた世界における世界経済の状況についての展望も提示されていなかった。そして社会化に対して口先ではそれに対する忠誠を告白していたにもかかわらず、いかなる党大会もいかなる全国協議会も、ドイツや世界の経済的・技術的構造がいかに変わってきたかとか、またどのような経済的・技術的枠組の中でこの所有秩序における困難でラディカルな手術が実行されるべきかということについて、説明を行なってはいなかった。

そこでは、ドイツ帝国の戦争政策や多数派社会民主党によるその促進に対して憤激していたにもかかわらず、こうした政策の背後にある経済的かつ生産

*（原注）USPD の「左派」の権威ある代表者達に対しては、最近の東独における USPD 研究でも再三再四、彼らが1919年から20年にかけて、まだ党の役割についてのレーニンの理論を十分正しく理解していなかったとして、非難されている。これについては H. シュテッカーが彼の父について書いた以下の研究を参照せよ。

Helmut Stoecker; Walter Stoecker. Die Frühzeit eines deutschen Arbeiterführers. 1891~1920, Dietz-Verlag, Berlin (DDR) 1970, SS. 175, 192, 196.

技術的な原因とか原動力についての分析は殆どなされていなかった。1919年のライプチヒの党大会で報告されそしてそれ以前の綱領に対する長大な歴史的概括を提供したあの長時間に及ぶ綱領報告にしても、たしかに資本制的発展の「帝国主義的」段階について扱っていたにしても、それは、ドイツおよび全世界の戦後資本主義の具体的な解明の試みについては全く触れておらず、また議論さえもされなかったのである。(しかもそこでは、第3インターの信奉者達の誰一人として、モスクワにとって唯一権威をもっていたあのレーニンの帝国主義論へと党の進路変更を要求しなかったのであった。恐らくレーニンの理論体系の中でこの部分は一般的にまだ知られていなかったのであろう。)

今上に述べてきたような概念群のいかなるものも体系的には取り扱われていなかったし、またそれらのいかなるものに対してもそれにそくしたまじめな意見表明はなされていなかった。そして党大会での討論においてこうしたことへの議論が欠けていたということに対して、あるいは、外部の状況の目まぐるしい変化で忙がしかったとか党が短命であったとかということの中に、その説明が求められるかも知れない。おそらく、あれやこれやの種類の具体的な問題が議事日程に上っており、しかもそれらは決定を求めていたため、重要な事柄のためには殆ど時間が足りなかったのだろう。その上、そうした具体的問題に対しては、党内の種々の党派がそれぞれに党の曖昧な一般の立場という見張台から反応したに違いなかった。そして大会での諸決定は、そうした会議を超えてしっかりと捉まえておくべき党の死活に関わる重要な問題を隠蔽してしまった。ここでもまた、時事の問題に対して態度を決めねばならないという強制が、党に対して外から課せられていたと言われうるであろう。こうしたことは、この党の命をほぼ半年もの間支配し挙句の果は党を崩壊させたあのインターナショナルな組織の問題においても同じであった。

しかしながら、このように党大会などで欠けている部分を列挙することは、党の内的生命と党の外部への自己主張とのために現実に取り扱われた諸テーマを列挙することの意味をも鮮明にしてくれるだろう。どのような問題がその中央の諸会議において議論の素材として挙げられていたか、そこでの議論の内容はどんなであったか、そしてまたどのような形式で論争が進められたか、こういったことを、一層巾の広い研究にとりかかる前に、人は知っていなければならない。

様々の条項に分けられた分析を始めるに当って、人が政治的意志形成の種々の次元を再度総括しようと試みるならば、政治学的な原則においては、政治的

行動にとっての諸条件こそが問題であるだろう。そしてこれには直接的に著者の主観的関心が結びついている。この現在という局面がそこに結びついているあの具体的な歴史的な事件の中で、政治的行動を決定するものは何だったのだろうか。また人は、ここに扱う党に対する知識から、党と党の指導というものの影響力とか、党内民主主義の諸前提とか、そして更には考え方の自由と行動能力との関連とかについて、一般化できうるような結論を抜き出すことが可能だろうか。この私の著書は、たとえ暫定的なものではあれ、そうした問への一つの回答を手探りしてみようという試みである。

<付 記>

ここに紹介できなかった本文の章別構成は、以下のようになっている。

1. USPD の成立
2. USPD の発展
3. USPD の分裂
4. USPD の没落